宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第82集

西畦原第１遺跡
西畦原第２遺跡Ｄ区
（鬼界アカホヤ火山灰層上面）

Nishiunewara1　Site
Nishiunewara2　Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査報告書３

2004

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成12年度から実施してまいりました。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した児湯郡新富町所在の西畦原第１遺跡及び西畦原第２遺跡Ｄ区は、平成12年度から平成14年度にかけて発掘調査を行ったものです。調査によって、西畦原第１遺跡では弥生時代中期から後期にかけての住居跡を、西畦原第２遺跡Ｄ区では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての住居跡を検出しました。また、瀬戸内系の凹線文土器や、出土例の少ない釣針が出土しました。このように、東九州自動車道（都農～西都間）建設にかかる発掘調査現場では数少ない、弥生時代の遺構・遺物を検出できたことは意義のあることだと思います。

ここに報告する内容が学術面での資料や学校教育・生涯学習の場で多くの方々に活用されるとともに、今後の埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、現地での調査及び報告書作成にあたってご指導いただいた多くの関係諸機関や地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成16年 2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　米良　弘康

例　言

1　本書は東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが行った西畦原第１遺跡及び西畦原第２遺跡Ｄ区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、西畦原第１遺跡が平成12年11月６日から平成13年７月31日まで、西畦原第２遺跡Ｄ区が平成14年５月17日から平成14年９月30日まで行った。

3　発掘調査にあたっては、新富町教育委員会及び地元の方々の協力を得た。

4　現地での実測及び写真撮影は南中道　隆・新町　芳伸・加藤　学・秋成　雅博・日高　敬子・金丸　史絵が行った。

5　空中写真撮影については九州航空株式会社に、自然科学分析については（株）古環境研究所に、測量については（株）村上測量設計事務所・（有）タイユー測量設計・（有）服部測量設計に委託した。

6　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成・遺物実測・トレースは整理作業員の協力を得て南中道・新町・加藤・秋成・日高・金丸が行った。遺物写真撮影は今塩屋　毅行が行った。

7　土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

8　本書では日本道路公団作成の地形図と国土地理院発行の５万分の１の図を使用した。

9　本書で使用した方位は座標北（Ｇ．Ｎ．）と磁北（Ｍ．Ｎ．）である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海抜絶対高である。

10　本書で使用した遺構略号は次の通りである。

ＳＡ…竪穴住居　ＳＢ…掘立柱建物　ＳＣ…土坑　ＳＩ…礫群・集石遺構　ＳＺ…不明遺構

11　本書の執筆及び編集は南中道・新町・谷口が担当した。

12　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

第１章　はじめに
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
第２章　西畦原第１遺跡の調査
第１節　調査の概要 …… 6
第２節　基本層序 …… 6
第３節　旧石器時代の遺構・遺物
1　礫群 …… 7
2　包含層遺物 …… 7
第４節　縄文時代の遺構・遺物
1　集石遺構 …… 15
2　土坑 …… 15
3　包含層遺物 …… 18
第５節　弥生時代の遺構・遺物
1　竪穴住居 …… 22
2　掘立柱建物 …… 26
3　その他の遺構 …… 29
4　包含層遺物 …… 29
第６節　まとめ
第３章　西畦原第２遺跡Ｄ区（鬼界アカホヤ火山灰層上面）
第１節　調査の概要 …… 39
第２節　基本層序 …… 39
第３節　弥生時代～古墳時代にかけての遺構・遺物
1　住居 …… 41
2　土坑 …… 54
3　包含層遺物 …… 54
第４節　古代の遺構 …… 57
第５節　まとめ …… 57

挿 図 目 次

西畦原第１遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　周辺地形図 …… 5
第３図　西畦原第１遺跡基本土層図 …… 6
第４図　西畦原第１遺跡旧石器時代及び縄文時代遺構分布図 …… 8
第５図　西畦原第１遺跡鬼界アカホヤ火山灰層以前の土層断面図－南北ベルト …… 9
第６図　西畦原第１遺跡鬼界アカホヤ火山灰層以前の土層断面図－東西ベルト …… 10
第７図　ＳＩ300実測図 …… 11
第８図　ＳＩ200実測図 …… 11
第９図　ＳＩ209実測図 …… 12
第10図　西畦原第１遺跡旧石器時代遺物分布図 …… 13
第11図　旧石器時代出土遺物実測図 …… 14
第12図　ＳＩ100実測図 …… 16
第13図　ＳＩ101実測図 …… 16
第14図　ＳＩ102実測図 …… 16
第15図　ＳＣ103実測図 …… 17
第16図　ＳＣ201実測図 …… 17
第17図　西畦原第１遺跡縄文時代遺物分布図 …… 19
第18図　縄文時代出土遺物実測図１ …… 20
第19図　縄文時代出土遺物実測図２ …… 21
第20図　西畦原第１遺跡弥生時代遺構分布図 …… 23
第21図　弥生時代包含層出土遺物分布図 …… 24
第22図　ＳＡ１実測図 …… 25
第23図　ＳＡ１出土遺物実測図１ …… 25
第24図　ＳＡ２及びＳＺ67実測図 …… 27
第25図　ＳＡ２及びＳＺ67出土遺物実測図１ …… 27
第26図　ＳＡ２及びＳＺ67出土遺物実測図２ …… 28
第27図　ＳＡ３実測図 …… 28
第28図　ＳＡ３出土遺物実測図 …… 28
第29図　ＳＢ４実測図 …… 30
第30図　ＳＢ５実測図 …… 30
第31図　ＳＢ70実測図 …… 30
第32図　ＳＢ70出土遺物実測図 …… 30
第33図　ＳＺ68実測図 …… 30
第34図　ＳＺ68出土遺物実測図１ …… 30
第35図　ＳＺ68出土遺物実測図２ …… 31

第36図　包含層出土遺物実測図１ …… 33
第37図　包含層出土遺物実測図２ …… 34
第38図　包含層出土遺物実測図３ …… 35
第39図　包含層出土遺物実測図４ …… 36
第40図　包含層出土遺物実測図５ …… 37

西畦原第２遺跡Ｄ区

第41図　西畦原第２遺跡Ｄ区土層柱状図 …… 39
第42図　西畦原第２遺跡Ｄ区弥生時代～古墳時代の遺構分布図 …… 40
第43図　ＳＡ１実測図 …… 42
第44図　ＳＡ１出土遺物実測図１ …… 42
第45図　ＳＡ１出土遺物実測図２ …… 43
第46図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９実測図１ …… 46
第47図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９実測図２ …… 47
第48図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９出土遺物実測図１ …… 48
第49図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９出土遺物実測図２ …… 49
第50図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９出土遺物実測図３ …… 50
第51図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９出土遺物実測図４ …… 51
第52図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９遺物出土状況 …… 52
第53図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９出土遺物接合状況１ …… 52
第54図　ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９出土遺物接合状況２ …… 53
第55図　ＳＡ３実測図 …… 55
第56図　ＳＡ３出土遺物実測図 …… 55
第57図　ＳＣ10実測図及び出土遺物実測図 …… 55
第58図　包含層出土遺物実測図１ …… 56
第59図　包含層出土遺物実測図２ …… 58
第60図　道路状遺構実測図 …… 58

表　目　次

西畦原第１遺跡

第１表　旧石器時代出土石器計測表 …… 59
第２表　縄文時代出土石器計測表 …… 59
第３表　弥生時代出土土器観察表１ …… 60
第４表　弥生時代出土土器観察表２ …… 61
第５表　弥生時代出土石器計測表 …… 62

西畦原第２遺跡Ｄ区

第６表　弥生時代～古墳時代出土石器・鉄器計測表 …… 62
第７表　弥生時代～古墳時代出土土器観察表１ …… 63
第８表　弥生時代～古墳時代出土土器観察表２ …… 64

図　版　目　次

図版１　西畦原第１遺跡・西畦原第２遺跡Ｄ区遠景及び全景 …… 65

西畦原第１遺跡

図版２　西畦原第１遺跡全景 …… 66
図版３　旧石器時代及び縄文時代検出遺構 …… 67
図版４　縄文時代及び弥生時代検出遺構 …… 68
図版５　弥生時代検出遺構及び土層 …… 69
図版６　旧石器時代及び縄文時代出土遺物、弥生時代遺構出土遺物 …… 70
図版７　弥生時代遺構出土遺物、弥生時代包含層出土遺物 …… 71
図版８　弥生時代包含層出土遺物 …… 72
図版９　弥生時代包含層出土遺物 …… 73

西畦原第２遺跡Ｄ区

図版10　西畦原第２遺跡Ｄ区全景 …… 74
図版11　検出遺構 …… 75
図版12　ＳＡ１及びＳＡ２出土遺物 …… 76
図版13　ＳＡ２出土遺物 …… 77
図版14　ＳＡ２・ＳＡ３及びＳＣ10出土遺物、包含層出土遺物 …… 78
図版15　包含層出土遺物 …… 79

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道の門川～西都間は、平成８年12月、国土開発幹線自動車道建設審議会において整備計画区間に策定され、そのうち都農～西都間は、１年後の平成９年12月に建設大臣（現国土交通大臣）より日本道路公団への施工命令が発令された。そして平成11年度から日本道路公団九州支社と宮崎県との間で契約が結ばれ、宮崎県埋蔵文化財センターが東九州自動車道（都農～西都間）の建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなった。

西畦原第１遺跡の北東側約7,900㎡の確認調査は、平成12年６月２日～12日、７月19日～８月３日、９月19日～25日の３回にわたって行われた。その結果、調査対象区域中央部においてアカホヤ火山灰層上の黒色土層から弥生時代中期後葉から後期前葉の土器片が、また、一ツ瀬川土地改良区の道路を挟んで南西側において前述した調査区中央部分と同時期の土器片及びアカホヤ火山灰層直下から集石遺構が確認された。しかし、一段低い東側は旧谷部にあたり、客土が厚く堆積し、下はすぐに砂礫層となり湧水が激しいために本調査は必要ないと判断した。また、北側でも表土直下にＡＴ層が見られるくらい削平を受けており、本調査の必要はないと判断した。

この結果を受けて、日本道路公団と宮崎県教育委員会との間で協議が行われ、まず調査対象区域中央部分から南側約4,600㎡について第一次調査を行うことになった。第一次調査は平成12年11月６日～平成13年７月31日まで行われた。

さらに、平成14年３月11日～３月19日に調査対象区域西側の確認調査を行った。ここも谷筋にあたり湧水があるものの、高原スコリア層下で硬化面が、さらに谷筋の深い客土下の黒褐色土中から弥生土器が出土した。よって、第一次調査で調査できなかった南西側3,000㎡について平成14年５月17日から第二次調査を行った。ところが、西畦原第２遺跡との境界部分で住居の端部を検出したため、同遺跡の町道から東側の4,550㎡を加えるとともに、段丘面から考えて、この部分を西畦原第２遺跡Ｄ区と名称を変更し、鬼界アカホヤ火山灰層上面の調査を行った。第二次調査は平成14年９月30日をもって終了した。

第２節　調査の組織

西畦原第一遺跡の調査組織は次の通りである。

調査主体　宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野　剛	（平成12・13年度）
	米良　弘康	（平成14・15年度）
副所長	菊地　茂仁	（平成12・13年度）
	大園　和博	（平成14・15年度）
	岩永　哲夫	（平成12年度～平成15年度）
調査第一課長	面高　哲朗	（平成12・13年度）
	児玉　章則	（平成14・15年度）
調査第一係長	谷口　武範	（平成13年度～15年度）
調査第二係長	長津　宗重	（平成12年度～15年度）
主査（調整担当）	吉本　正典	（平成12年度～15年度）

主任主事（ 同上 ）	和田　理啓（平成12年度）
主査（調査担当）	南中道　隆（12年度～14年度）
主査（　同上　）	新町　芳伸（平成12・13年度）
主任主事（ 同上 ）	加藤　学　（平成14年度）
調査員（　同上　）	秋成　雅博（平成12年度）
調査員（　同上　）	日高　敬子（平成13年度）
調査員（　同上　）	金丸　史絵（平成14年度）

調査指導委員

小畑弘己（熊本大学）　泉　拓良（奈良大学）　本田通輝（鹿児島大学）　田崎博之（愛媛大学）
柳沢一男（宮崎大学）　広瀬和雄（奈良女子大学）　加藤真二（文化庁）　佐藤宏之（東京大学）
橘　昌信（別府大学）　宮田栄二（鹿児島県教育委員会）　青山尚友・松田清孝（宮崎県総合博物館）

第３節　遺跡の位置と歴史的環境

１　遺跡の位置

西畦原第１遺跡及び第２遺跡は、宮崎平野の北西側周縁部に位置し、児湯郡新富町大字新田に所在する。ここは、一ツ瀬川の西からの流れが大きく湾曲する部分の左岸に広がる標高80m前後の台地上にあり、本遺跡は三財原面とそこに刻まれた開析谷の深年Ⅱ面が入り組む緩斜面に立地している。この近くの上新田小学校南東側で鬼付女川・三財原川・大潤川が合流し、それぞれの谷底平野に水田が分布している。本遺跡の北西側には湧水地があり、以前は棚田として利用されていたと聞く。その後、耕地整理され、第一次調査区の東側と南側には客土を厚く盛り、水田としてだけではなく、排水管を施して各種作物の畑としても利用されてきた。

２　周辺の遺跡と歴史的環境

(1)旧石器時代

この時代の特筆すべきものは、本遺跡周辺で大野寅夫氏が表採された、いわゆる「畦原型細石核」の存在である。これらは南九州に広く分布しているが、残念ながら表採であるため標式遺跡である当地でどの土層中に含まれているのか確認できていない。しかし、航空自衛隊新田原基地の南隣の溜水遺跡では、ナイフ形石器や角錐状石器、細石刃などとともに畦原型細石核と思われる円礫が出土している。また、銀代ヶ迫遺跡ではナイフ形石器やラウンドスクレーパー等の遺物が出土している。旧石器時代の遺物の出土は新田原面の台地上に多い。

(2)縄文時代

この時代の代表的な遺跡として本遺跡の南西約３ｋｍ程に瀬戸口遺跡がある。ここは23基の集石遺構と草創期の隆起線文土器や早期の押型文・貝殻条痕文土器及び石鏃、石斧などが出土しており、生活の様子をうかがい知ることができる貴重な遺跡である。また、藤掛遺跡や銀代ヶ迫遺跡などでは、縄文早期の集石遺構や遺物が出土しているが、アカホヤ火山灰降下後の前期以降の遺跡は少ない。

(3)弥生時代

前期の遺跡として、本遺跡の南東約７ｋｍ程に今別府遺跡がある。ここでは県内では宮崎市の橿遺跡に次ぐ早い時期の板付Ⅱ式併行期の壺が表採されている。

中期の遺跡としては、本遺跡の南東約６ｋｍ程に、円形の竪穴住居及びV字溝などの遺構や壺・甕などの弥生土器が出土した鐙遺跡がある。また、少し時代が下がって中期末から後期初めの遺跡として新田原遺跡がある。ここは本遺跡の南南東約２ｋｍ程に位置し、花弁状住居を含む12軒の竪穴住居や４基の貯蔵穴などの遺構が検出されている。また、はねあがり口縁の甕や矢羽根透かしの高坏などの土器、磨製石鏃や砥石などの石器といった遺物が出土している。

後期の遺跡としては鬼付女西遺跡や園田遺跡、銀代ヶ迫遺跡などがあり、竪穴住居などの遺構や遺物が出土している。また、本遺跡の西約２ｋｍ程の川床遺跡では方形及び円形周溝墓を含む 195基の土壙墓・木棺墓が検出され、その出土遺物からは西日本全域に及ぶ広域な交流が推し量れる。

(4)古墳時代

県内で最古の古墳、４世紀前半と推定される下屋敷古墳が本遺跡の南東約７ｋｍにある。

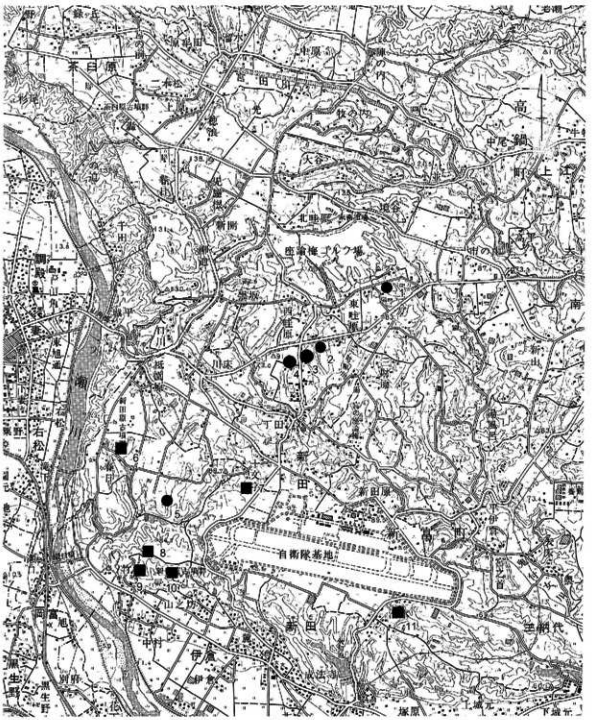
また、航空自衛隊新田原基地の西側にある山之坊古墳群や祇園原古墳群、さらには県内最大の古墳群である西都原古墳群では、４世紀代には前方後円墳の築造が始まっている。集落遺跡としては八幡上遺跡や銀代ヶ迫遺跡などが南西部約４ｋｍ程に位置している。

５世紀後半に入ると、西都原古墳群の女狭穂塚・男狭穂塚古墳の出現によって、西都原古墳群で盛んに築造されていた前方後円墳に空白ができ、それに呼応するように６世紀に入って、一ツ瀬川対岸の祇園原古墳群などで前方後円墳の活発な造営が見られるようになる。このことはこの頃一ツ瀬川水系の首長権の再編が行われたと考えられる。また、５世紀後半からの集落遺跡としては、 300軒以上の方形の竪穴住居が確認された上薗遺跡が、南西約５ｋｍ程に位置している。

(5)古代～中世

明確な国境を持つ律令制の「国」として「日向国」が文献に登場するのは延暦16年（797年）に編纂された『続日本紀』の文武２年（698年）９月28日の条であり、この年までには成立したと考えられる。その下で『日向国風土記』逸文（８世紀）、『続日本後紀』（９世紀）、さらには『延喜式』・『和名類聚抄』（10世紀）に「児湯郡」の記載があり、日向国衙及び国分寺跡が西都市に所在するなど、当地が「日向国」成立当時から脈々と存在し、しかもその中心であったことを示している。

『日向国図田帳写』（建久８年 1197年）によると、この辺りは安楽寺領や花蔵院領、宇佐宮領、妻宮領、国富領、島津庄などの荘園が入り組み、複雑な様相を呈していた。こういった荘園の拡大の中で、在国司職として土持氏が勢力を強めていったが、やがて伊東氏が勢力を進展させ、室町時代に入ると児湯一帯は伊東氏の日向国支配の中心地となる。その後、島津氏が伊東氏を追いやるが、豊臣政権に島津氏は敗れ、高鍋一帯を秋月氏に譲る。しかし、新田や都於郡や佐土原などは安堵され、近世を迎えることとなる。



● 東九州自動車道関連の遺跡

1　音明寺第１遺跡　　2　東畦原第３遺跡　　3　西畦原第１遺跡

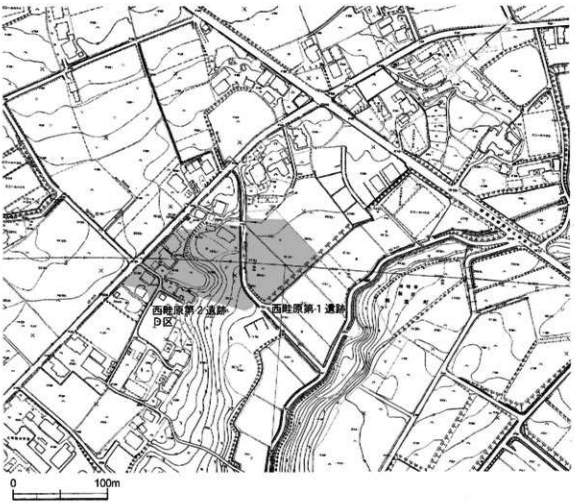
4　西畦原第２遺跡Ｄ区　　5　向原第１遺跡

■ その他の遺跡

6　瀬戸口遺跡　　7　新田原遺跡　　8　八幡上遺跡

9　銀代ヶ迫遺跡　　10　七又木遺跡　　11　溜水遺跡

第１図　遺跡位置図　（1／50,000）



第２図　西畦原第１遺跡及び西畦原第２遺跡Ｄ区　周辺地形図　（1／4000）

〈参考文献〉

「溜水遺跡」『新宮町文化財調査報告書』第11集 1990年

「銀代ケ迫遺跡」『新宮町文化財調査報告書』第13集　1992年

「新田原遺跡」「瀬戸口遺跡」「蔵圃地下式横穴墓」『新宮町文化財調査報告書』第４集　1986年

「新宮町の文化財」遺跡詳細分布調査報告書　新宮町教育委員会　1982年

新宮町史　通史編

新宮町史　資料編

西畦原第1遺跡の調査

第３節　旧石器時代の遺構・遺物

１　礫群

ＳＩ３００（第７図）

調査区中央より北西側の境界部分に位置する。「第１節　調査の概要」で述べたようにＡＴ層より下の暗褐色土層（Ⅺ層）から検出された。およそ６ｍ×４ｍの範囲に疎らに分布し、総数は66個、内赤化礫が13個含まれる。４～30ｃｍの大きさで、石材は主に砂岩や尾鈴山酸性岩である。破砕礫よりも完形礫の方が多く、中には敲石などの亜礫器と思われるものも含まれる。炭化物は検出されなかった。

ＳＩ２００（第８図）

調査区中央より北西側に位置する。小林軽石を含む層（Ⅶ層）から検出された。およそ３ｍ×１ｍの範囲内に疎らに分布し、総数は20個で、すべて赤化礫である。２～17ｃｍの大きさで、石材は主にホルンフェルスである。炭化物は検出されなかった。

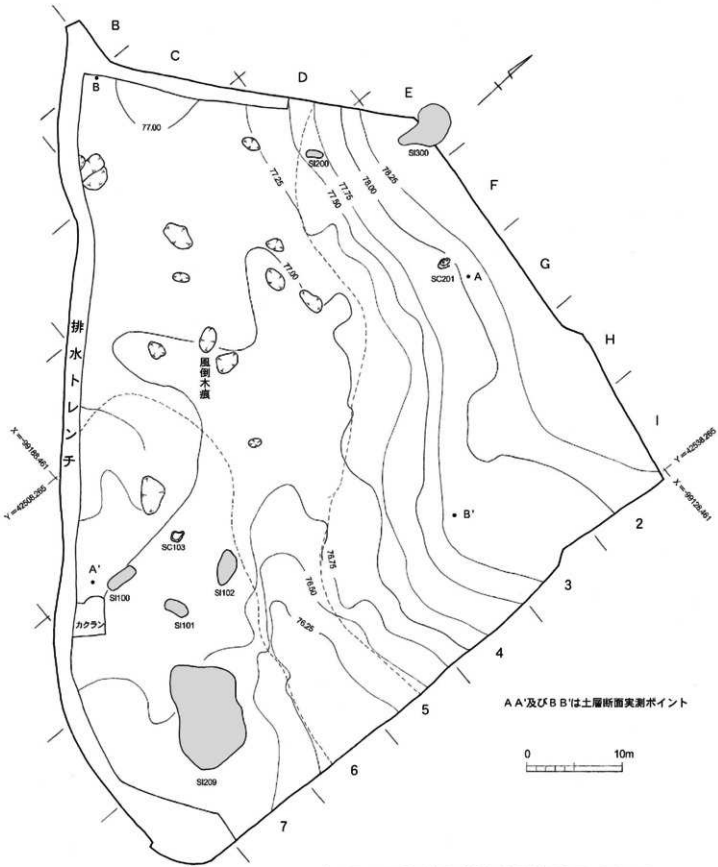
ＳＩ２０９（第９図）

調査区中央より南東側に位置する。小林軽石を含む層（Ⅶ層）から検出された。およそ11ｍ×８ｍの範囲内に集中して分布する。調査区内を走る谷筋には、土石流による流れ込みと思われる50㎝を越す尾鈴山酸性岩の巨礫がかなりの個数分布していた、その下流付近にあたり、尾鈴山酸性岩の巨礫の間に５～15㎝ほどの砂岩や頁岩等の礫が多く含まれる。中には剥片が３点含まれ、炭化物もわずかながら検出された。

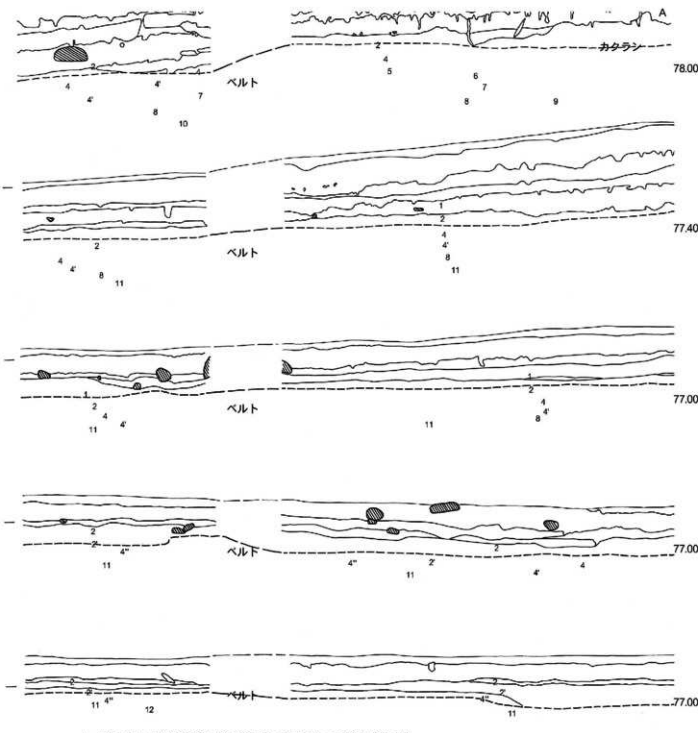
２　出土遺物（第11図）

旧石器時代の包含層から総数28点が出土した。その内訳は剥片18点、細石刃２点、ナイフ形石器２点、敲石２点、磨石２点、礫器及び石核各１点である。分布は第10図に示した。調査区を方位で４分割すると南東側と北西側に多いが、出土点数が少なく、明確なことは言えない。

１と２は黒曜石製の細石刃である。ともに両端が欠損している。３と４は頁岩製のナイフ形石器である。ともに左側辺を刃部とし、右側辺に刃潰し加工が施されている。５はホルンフェルス製の礫器である。円礫から最初に剥ぎ取った剥片の１縁辺を両面から簡単に加工している。６はホルンフェルス製の敲石である。敲石としては小型で、２ヶ所の敲打痕がある。７～14は剥片である。一部に自然面を残した大型の縦長剥片が多い。13は唯一横長剥片である。



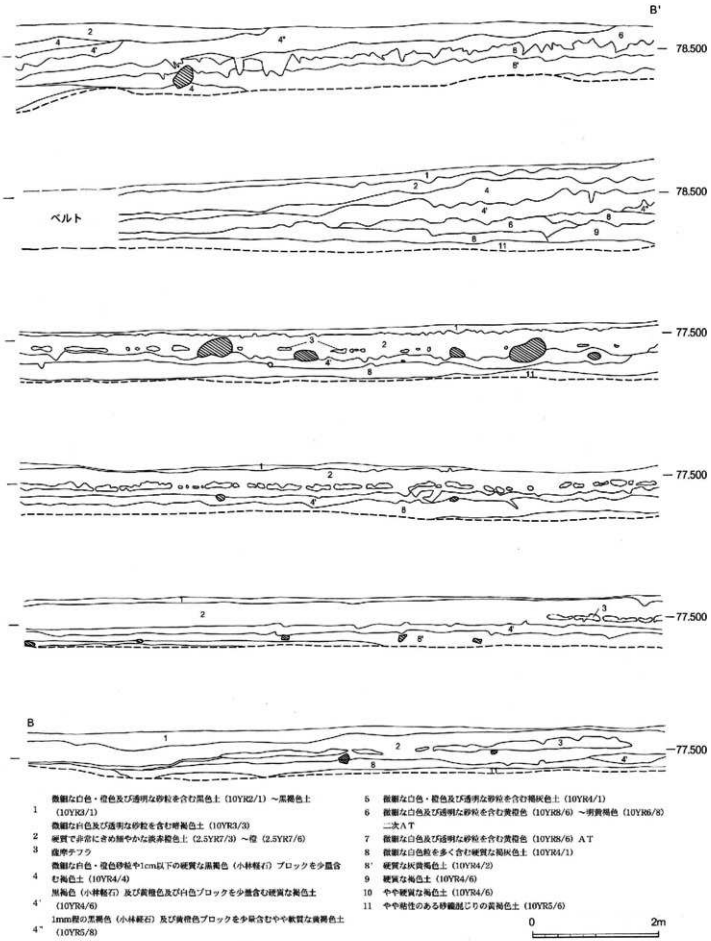
第４図　旧石器時代及び縄文時代遺構分布図（1／400）



1 微細な白色・橙色及び透明な砂粒を含む黒色土（10YR2/1）～黒褐色土（10YR3/1）

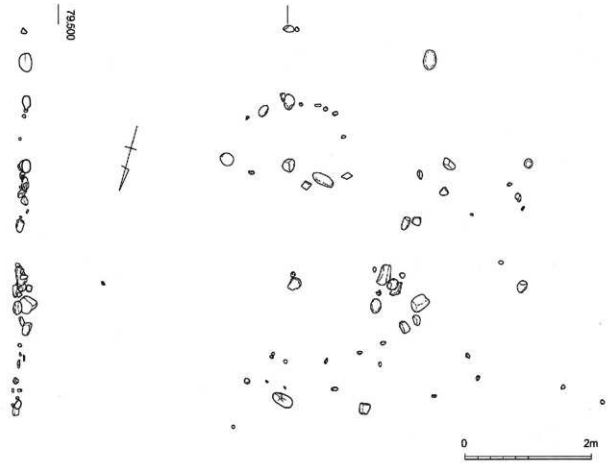
1 微細な白色・橙色及び透明な砂粒を含む黒色土（10YR2/1）～黒褐色土（10YR3/1）
2 微細な白色及び透明な砂粒を含む暗褐色土（10YR3/3）
3 被質で非常にきめ細やかな淡赤橙色土（2.5YR7/3）～橙（2.5YR7/6）鹿摩テフラ
4 微細な白色・橙色砂粒や1cm以下の被質な黒褐色（小林軽石）ブロックを少量含む褐色土（10YR4/4）
4' 黒褐色（小林軽石）及び灰橙色及び白色ブロックを少量含む被質な褐色土（10YR4/6）
4" 1mm程の黒褐色（小林軽石）及び黄橙色ブロックを少量含むやや軟質な黄褐色土（10YR5/8）
5 微細な白色・橙色及び透明な砂粒を含む黒灰色土（10YR4/1）
6 微細な白色及び透明な砂粒を含む黄橙色（10YR6/6）～明黄褐色（10YR6/8）二次ＡＴ
7 微細な白色及び透明な砂粒を含む黄橙色（10YR6/6）ＡＴ
8 微細な白色粒を多く含む被質な褐灰色土（10YR4/1）
8' 被質な灰黄褐色土（10YR4/2）
9 被質な褐色土（10YR4/6）
10 やや被質な暗色土（10YR4/6）
11 やや粘性のある砂礫混じりの黄褐色土（10YR5/6）

第５図　鬼界アカホヤ火山火層以前の土層断面図　－南北ベルトー（1／30）

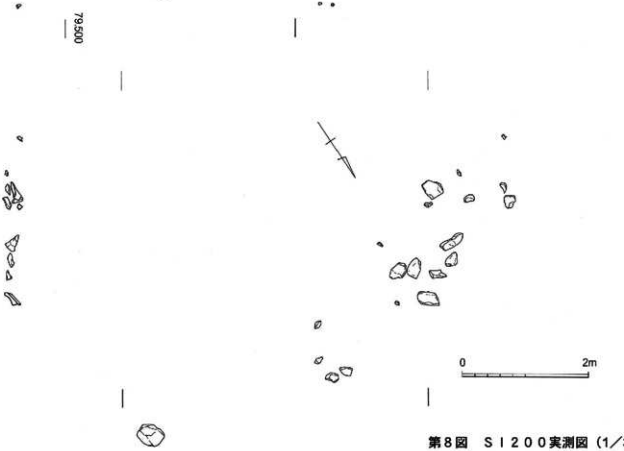


1 微細な白色・橙色及び透明な砂粒を含む黒色土（10YR2/1）～黒褐色土（10YR3/1）
2 微細な白色及び透明な砂粒を含む暗褐色土（10YR3/3）
3 硬質で非常にきめ細やかな淡赤橙色土（2.5YR7/3）～橙（2.5YR7/6）
4 鹿摩テフラ
微細な白色・橙色砂粒や1cm以下の硬質な黒褐色（小林軽石）ブロックを少量含む褐色土（10YR4/4）
4' 黒褐色（小林軽石）及び黄橙色及び白色ブロックを少量含む硬質な褐色土（10YR4/6）
4'' 1mm程の黒褐色（小林軽石）及び黄橙色ブロックを少量含むやや軟質な黄褐色土（10YR5/8）
5 微細な白色・橙色及び透明な砂粒を含む褐灰色土（10YR4/1）
6 微細な白色及び透明な砂粒を含む黄橙色（10YR8/6）～明黄褐色（10YR6/8）
二次ＡＴ
7 微細な白色及び透明な砂粒を含む黄橙色（10YR8/6）ＡＴ
8 微細な白色粒を多く含む硬質な褐灰色土（10YR4/1）
8' 硬質な灰黄褐色土（10YR4/2）
9 硬質な褐色土（10YR4/6）
10 やや硬質な褐色土（10YR4/6）
11 やや粘性のある砂織混じりの黄褐色土（10YR5/6）

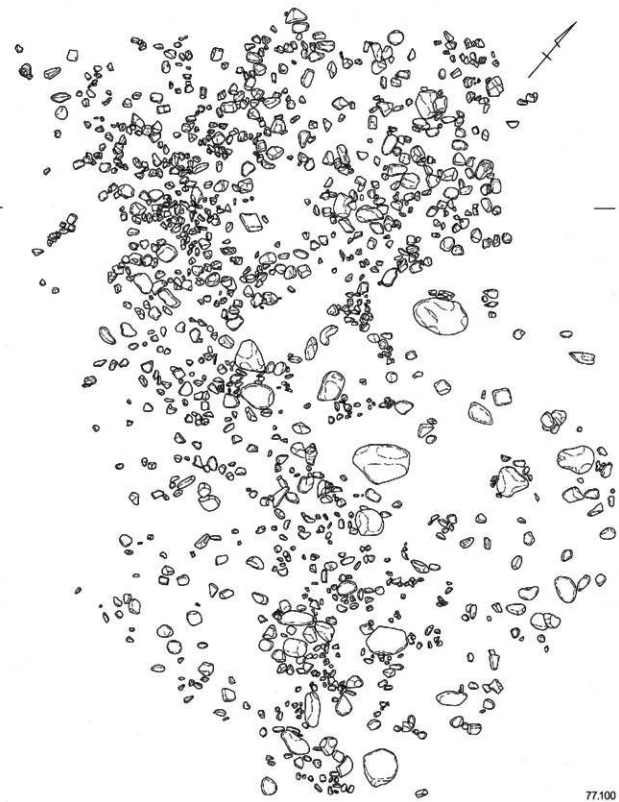
第６図　鬼界アカホヤ火山火層以前の土層断面図　－東西ベルト－（1／30）



第7図　ＳＩ３００実測図（1／30）



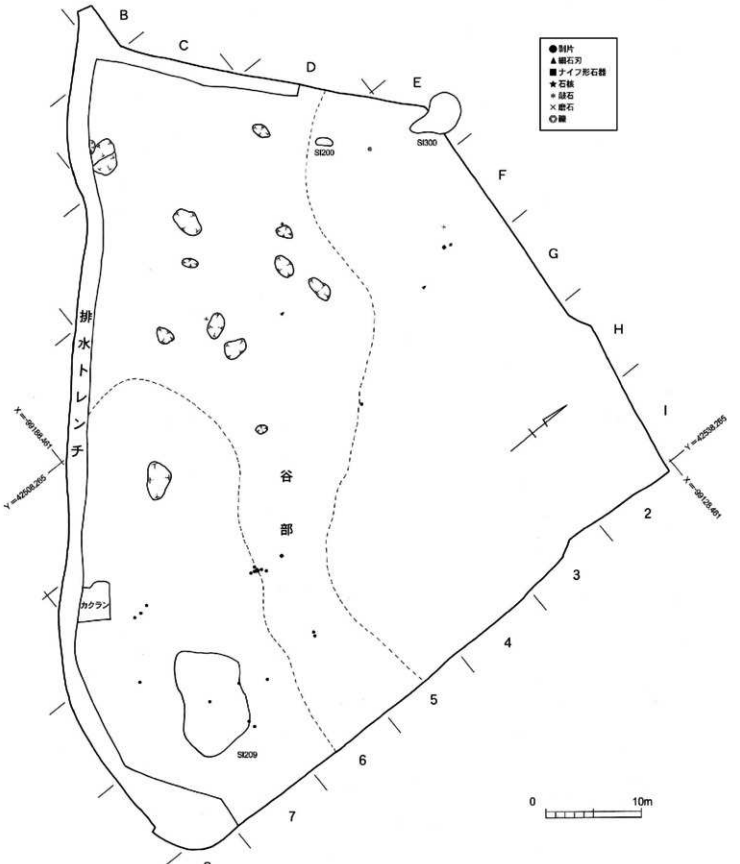
第8図　ＳＩ２００実測図（1／30）



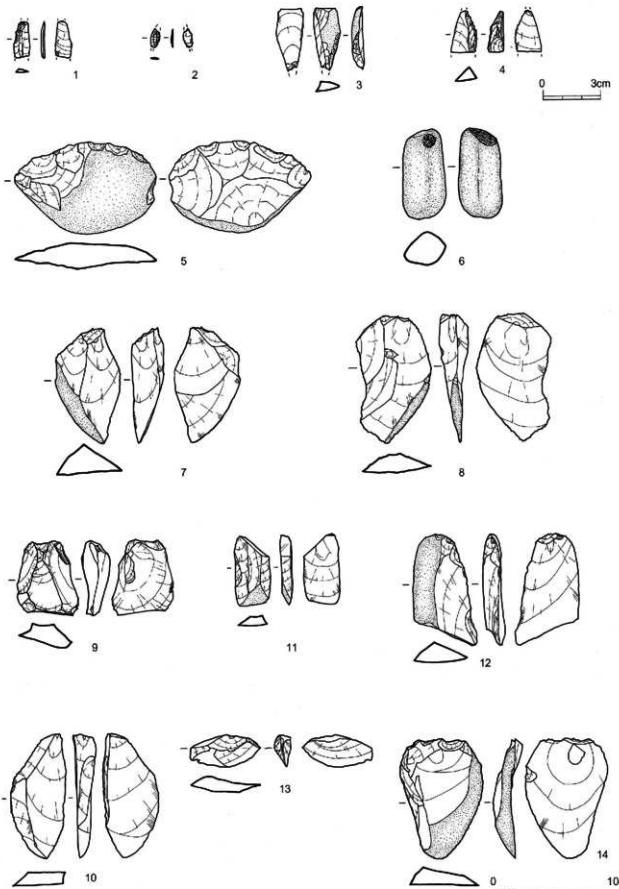
1a　小林軽石の粒を多く含む　非常に硬質な明黄褐色土（10YR6/8～5/8）
1b　小林軽石の粒を少し含む　ややしまりのない黄褐色土（10YR5/8）
2　小礫を多く含む　軟質で少し粘性のある褐色土（10YR4/6）

0　1m

第９図　ＳＩ２００実測図（1／60）



第10図　旧石器時代遺物分布図（1／400）



第11図　旧石器時代出土遺物実測図（1～4：1／2　その他：1／3）

第４節　縄文時代の遺構・遺物

鬼界アカホヤ火山灰直下のⅣａ層及びⅣｂ層から集石遺構３基と土坑２基を検出し、土器や打製石鏃を中心とした石器が出土した。

１　集石遺構

ＳＩ１００（第12図）

調査区中央より南東側に位置する。暗褐色土層（Ⅳｂ層）から検出された。およそ2.5m×1.5mの範囲内に疎らに分布し、総数83点で、内赤化礫が24個含まれる。７cm以下の大きさの破砕礫がほとんどで、石材は主にホルンフェルスや尾鈴山酸性岩である。掘り込みも敷石も持たず、炭化物も検出されなかった。

ＳＩ１０１（第13図）

調査区中央より南東側に位置する。暗褐色土層（Ⅵｂ層）から検出された。およそ２m四方の範囲内に分布し、総数131点で、内2/3の礫がおよそ１m×0.7mの範囲に集中する部分がある。12cm以下の破砕礫がほとんどで、石材は主にホルンフェルスや尾鈴山酸性岩である。掘り込みも敷石も持たず、炭化物も検出されなかった。

ＳＩ１０２（第14図）

調査区中央より南東部に位置する。暗褐色土層（Ⅳｂ層）から検出された。およそ３m×２mの範囲内に疎らに分布し、総数52個、内赤化礫が21個含まれる。11cm以下の大きさの破砕礫がほとんどで、石材は主にホルンフェルスである。掘り込みも敷石も持たず、炭化物も検出されなかった。

２　土坑

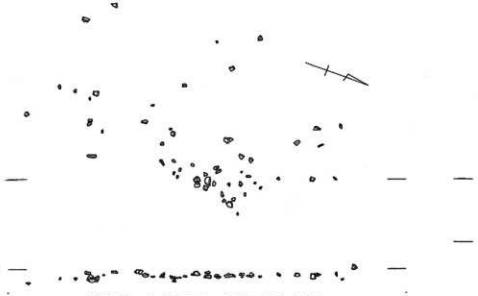
ＳＣ１０３（第15図）

調査区中央より南側に位置する。平面プランは北側に張り出しを持つ不整形を呈し、長軸1.41m、短軸1.33mで長軸方向は真北を指す。検出面から床面までの深さは最深部が0.8mを測る。特に中央部の0.73m×0.53mの円形状の黒色を呈する埋土中に、微細から１cmほどの球状の炭化物が集中して検出された。この炭化物を放射性炭素年代測定分析にかけたところBC5,740年という数値を得た。しかし、この遺構に供伴する遺物は出土していない。

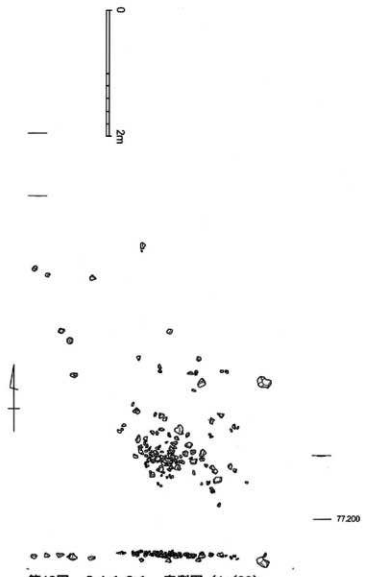
ＳＣ２０１（第16図）

調査区中央より北側に位置する。平面プランは、楕円形を呈し、長軸は1.54m、短軸は0.94mで、長軸方向は真北を指す。検出面から床面までの深さは最深部が0.75mを測る。調査区北側は耕作による削平を受けており、この遺構は小林軽石を含む層（Ⅶ層）上位面からの検出であるが、埋土の堆積状況や短軸方向の断面、埋土中に小林軽石を含むことなどから縄文時代早期頃の陥し穴遺構の可能性も考えられる。隣接する西畦原第２遺跡では４基の陥し穴遺構が検出されている。この遺構に供伴する遺物はない。また、炭化物も検出されていない。

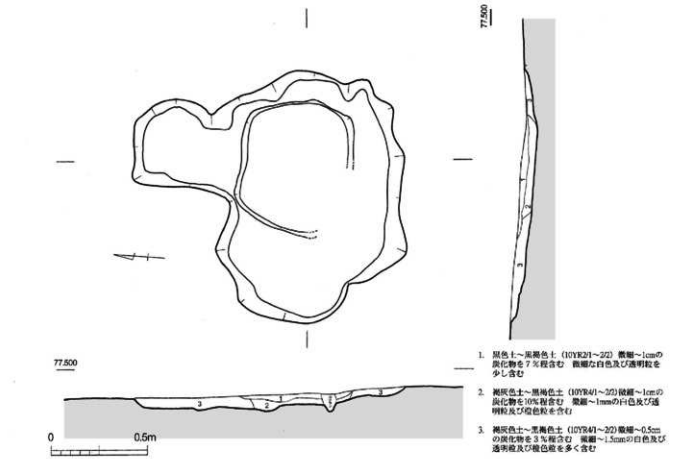
第14図　ＳＩ１０２　実測図（1／30）



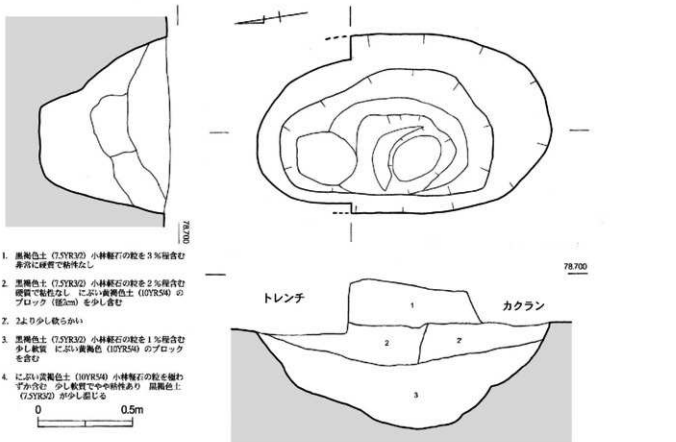
第12図　ＳＩ１００　実測図（1／30）



第13図　ＳＩ１０１　実測図（1／30）



第15図　ＳＣ１０３実測図（1／25）



第16図　ＳＣ２０１実測図（1／20）

3　包含層遺物

第18図から第19図に縄文時代の包含層出土遺物（Ⅳ層からⅥ層）を図示した。

土器

土器は5cm以下の小片が19点出土している。いずれも風化が激しいが、貝殻条痕文や撚糸文などの文様が認められる。出土地点はその多くがグリッドＦ６内で、隣接グリッドからも数点出土した。この南西側には、確認調査で鬼界アカホヤ火山灰直下の集石遺構を検出した西畦原第２遺跡の上り斜面が続いており、そこからの流れ込みの可能性が高いと思われる。

石器

石器は総数65点が出土し、その内訳は打製石鏃32点、剥片25点、石核５点、敲石・磨石・石皿各１点である。分布は調査区を方位で４分割すると南西部分に多く出土しているが、それ以外の特徴は特に見い出せない。

打製石鏃は、その形状により二等辺三角形（Ⅰ類）、正三角形（Ⅱ類）、異形（Ⅲ類）、不明（Ⅳ類）に大別し、Ⅰ類とⅡ類についてはその基部の形態により平基（ａ類）、浅い凹基（ｂ類）、深い凹基（ｃ類）、不明のもの（ｄ類）に細分した。

15～17はⅠａ類に属する。いずれも基部は直線的に作り出されているが、両側縁は15はほぼ直線的で、16・17はやや膨らみ、丸みを帯びている。17は鋸歯状側縁である。石材はいずれもチャートである。

18～29はⅠｂ類に属する。両側縁がやや膨らみ、丸みを帯びているものがほとんどであるが、21と27は側縁が直線的または少し外反するように作り出されている。22と29は鋸歯状側縁である。12点中７点の石材がチャートである。

30～36はⅠｃ類に属する。30は出土した打製石鏃の中ではもっとも大型で、いわゆる長脚鏃である。31は片脚欠損であるが、残存部分からⅠｃ類と判断した。30～33は姫島産黒曜石で作られている。

37は唯一頁岩製で、鋸歯状側縁である。残存部分からⅠ類と判断できたが、基部が欠損しており、細分できない。38・39も同様の理由からⅠｄ類とした。39は風化が激しく剥離の状況が判別できない。

40と41はⅡａ類に属する。39は基部に細かな剥離が見えるが、それ以外は二次加工されていない。

42と43はⅡｂ類に属する。どちらも側縁はほぼ直線状に作り出している。43は鋸歯状側縁である。

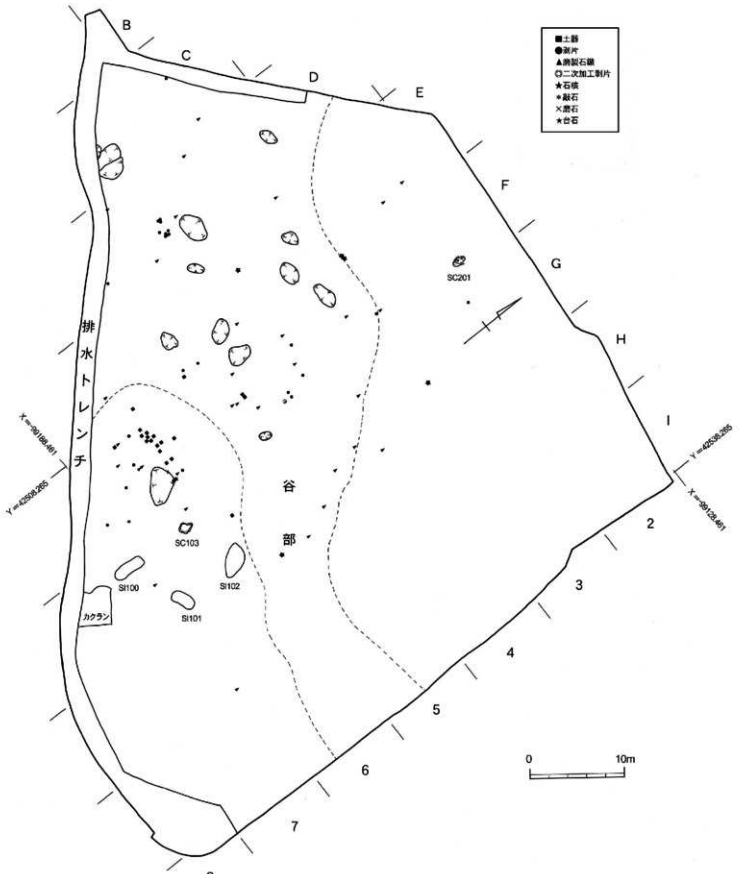
44はⅡｃ類に属する。基部はU字形に深く抉られており、いわゆる鍬形鏃である。45はⅢ類に属する。基部はU字形に抉られているが、側辺は基部に対してほぼ直口するように作られている。先端部が欠損で完全な形は分からないが、三角形以外の形状が類推される。

46と47はⅣ類に属する。46は残存部から類推すると、基部がU字形に深く抉られ、鋸歯状側縁の割と大型の石鏃であろう。

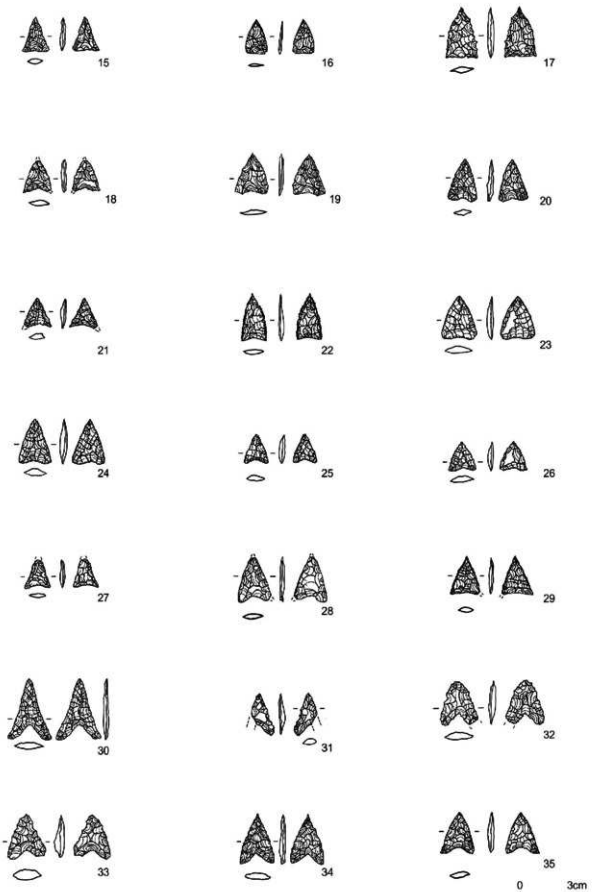
48と49は石核である。ともに割と大型の剥片を剥ぎ取ったものであるが、風化が激しい。

50は石皿である。表面に最大６cmほどの摩擦によるくぼみが見られる。裏面には１ヶ所敲打痕も見られる。

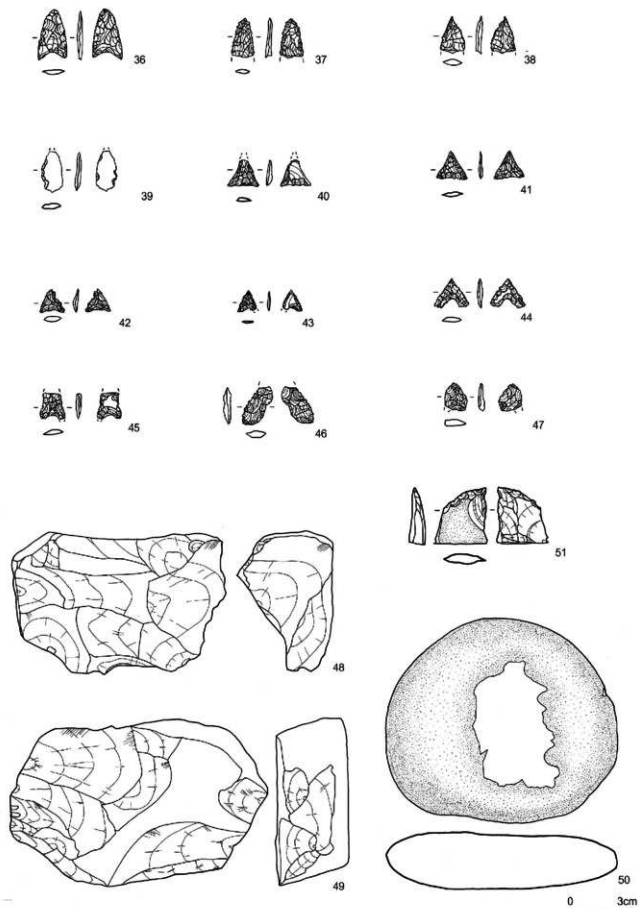
51は上部両側縁を表裏両面から連続的に加工し刃部を作り出した二次加工剥片である。



第17図　西畦原第１遺跡　縄文時代遺物分布図（1／400）



第18図　縄文時代出土遺物実測図(1)　(1／2)



第19図　縄文時代出土遺物実測図(2)　(1／2)

第５節　弥生時代後期の遺構・遺物

表土下の黒色土層（Ⅱａ層）から多数の土器片が出土した。土器の集中部も見られたが、鬼界アカホヤ火山灰層との互層（Ⅱｂ層）まで下げ、ようやく３軒の竪穴住居と３棟の掘立柱建物、２基の不明遺構の検出をみた。

１　竪穴住居

ＳＡ１（第22図）

調査区中央よりやや北西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長軸5.00m、短軸4.35mで長軸方位はN61°Wを指す。検出面から床面までの深さは最深部で0.42mを測り、貼床を有し、４本の主柱穴が確認された。住居の東角は、埋土から判断すると新しい時期のものと思われる溝に切られている。

遺物（第23図）は、甕（52～56）、男根状石製品（57）が出土した。52と53は甕の口縁部の小片である。54と55は胴部に刻目突帯を持つ甕の頸部～胴部である。54は口縁が「く」の字に外反する中溝タイプのものと考えられる。56は上げ底を呈し端部が外反する甕の底部である。内面は丁寧なナデ調整である。57は砂岩製で比較的上位の埋土中から出土したもので、特に加工を施した痕跡は見られない。

ＳＡ２及びＳＺ６７（第24図）

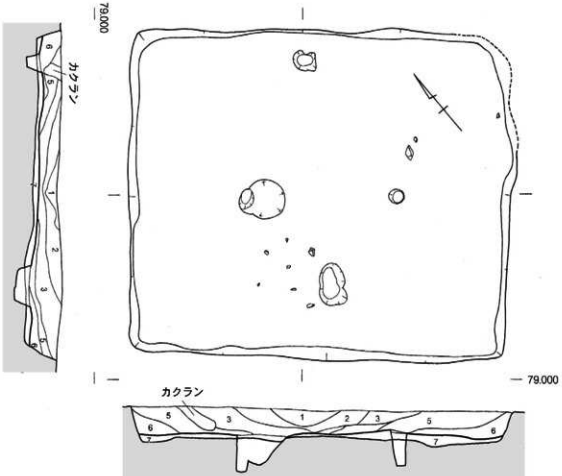
調査区中央よりやや北東側に位置する。耕作による削平が激しく、南壁及び東壁は確認できなかったが、平面プランは隅丸方形を呈すると推定され、長軸約4.3m、短軸約4.1mで長軸方向はN36°Eを指す。検出面から床面までの深さは最深部で0.30mを測る。ＳＺ67との重複により、柱穴と判別しづらかったが、位置や埋土の状況から２本の主柱穴を持つと判断した。また、中央から東側床面に受熱により赤化した直径0.25mほどの焼土が見られる。

ＳＺ67はＳＡ２の南側に位置し、ＳＡ２を切っている。耕作による削平が激しく、埋土も明瞭でなかったが、平面プランは西側に張り出しを持つ不整形を呈し、長軸5.78m、短軸4.95mで長軸はN19°Eを指す。検出面から床面までの深さは最深部が0.18mを測る。床面からの深さが0.4m前後の６本の柱穴と、長径約1.3m程で検出面からの深さ0.3m～0.4mの２基の土坑を伴う。直径が５ｍを越える比較的大型の竪穴住居や１間×１間の掘立柱建物等の可能性が考えられる。

遺物（第25・26図）は、甕（58～62）、壺（63）砥石（64～66）が出土した。58・59・61は口縁部が「く」の字に外反し、胴部に１条の貼付刻目突帯を持つ中溝タイプの甕である。61は突帯の刻目を施す際の工具に巻いた布目痕が看取できる。62は甕の口縁部であるが、ＳＺ６７から出土した破片と接合している。63は平底を呈する壺の底部で、ハケ目を施している。64～66は頁岩製の砥石である。66は大型のもので、表裏右側面の３面に研磨痕が見られる。

第20図　西畦原第１遺跡弥生時代遺構分布図（1／400）

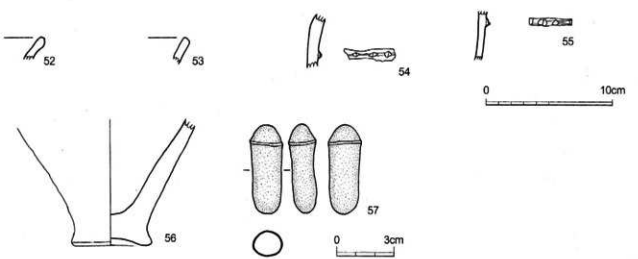
第21図　弥生時代包含層遺物分布図（1／400）



1. 1～2mm程の黄橙色(10YR7/8)の粒を少量含む軟質の黒褐色土(10YR3/1)
2. 1～2mm程の黄橙色(10YR7/8)の粒と1～2cm程の黄橙色(10YR7/8)のブロック少量含む黒色土(10YR2/1)
3. 1～5cm程の黄橙色(10YR7/8)のブロックと1～3cm程の灰色(7.5YR4/1)の硬質ブロックを多く含む黒色土(10YR2/1)
4. 5cm程の黄橙色(10YR7/8)のブロックと黄灰色(2.5YR4/1)の硬質ブロックを多量に含む黒褐色土(10YR3/1)
5. 2～3mm程の黄橙色(10YR7/8)の粒と2～3cm程の黄橙色(10YR7/8)のブロックを少量含む黒褐色土(10YR3/1)
6. 2～5cm程の黄橙色のブロックと2～3cmの灰オリーブ色(5YR4/2)の硬質ブロックを少量含む黒褐色土(10YR3/1)
7. 1～3cm程の黄橙色(10YR7/8)のブロックと2cm程の灰オリーブ色(5YR4/2)の硬質ブロックを多量に含むやや軟質の黒褐色土(10YR3/1)

0 2m

第22図　ＳＡ１実測図（1／50）



第23図　ＳＡ１出土遺物実測図（52～56：1／3　57：1／2）

ＳＡ３（第27図）

調査区中央よりやや南側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長軸2.69m、短軸2.29mと小型で長軸はＮ36°Ｅを指す。検出面から床面までの深さは最深部が0.34mを測る。北西壁のそばに１本の主柱穴と中央やや北西側に１本の柱穴が確認できた。

遺物（第28図）は、甕（67・68）、壺（69～71）が出土した。67は胴部で外面にハケ目を施している。68は少し上げ底を呈し端部が外反する。69は胴部に貼付突帯を持つが小片のため傾きは不明である。70は短頸壺の口縁部で外面がナデ及びハケ目調整、外面がナデを施している。71は底部付近で、外面はハケ目を施している。

２　掘立柱建物

ＳＢ４（第29図）

調査区中央よりやや南東側に位置する。構造は桁行１間梁行１間の南北棟で、規模は桁行2.4m、梁行2.04～2.24mを測る。棟方向はＮ70°Ｅを指す。柱穴の掘形は0.28～0.43mの円形を呈する。南側の梁は軸から少しずれるが、中間部分に浅めの柱穴を伴う。検出面が黒色土層と下の鬼界アカホヤ火山灰層との互層であり、構造が１間×１間ということで竪穴住居の主柱穴の可能性も考えられたが、検出できた３軒の竪穴住居の主柱穴よりも間隔が広いことや配列がほぼ並行に近いことなどから掘立柱建物と判断した。

遺物は甕の胴部と思われる小片が８点出土した。

ＳＢ５（第30図）

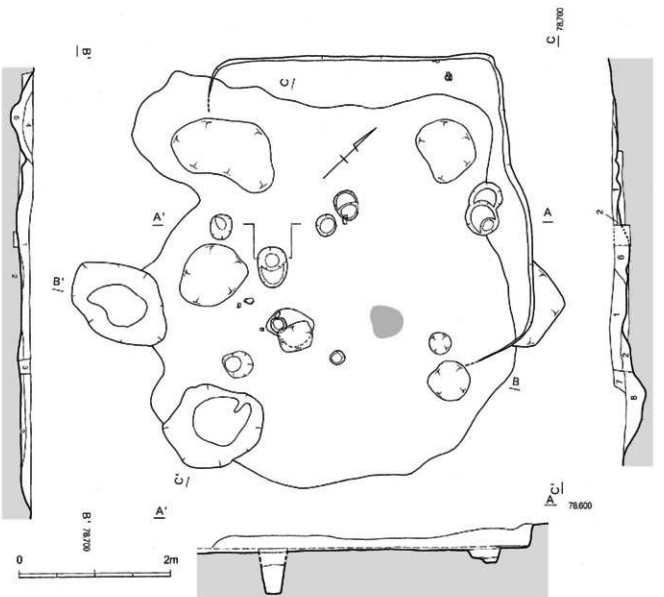
調査区中央に位置する。構造は桁行２間梁行１間の東西棟で、規模は桁行2.6～2.7m、柱間1.20～1.45m、梁行1.85～2.18mを測る。棟方向はＮ58°Ｗを指す。柱穴の掘形は0.30～0.42mの円形又は楕円形を呈する。南側の梁は建替えを行っている。また、桁の中間部分の柱穴は他と比べると浅い。

この遺構に供伴する遺物は出土していない。

ＳＢ70（第31図）

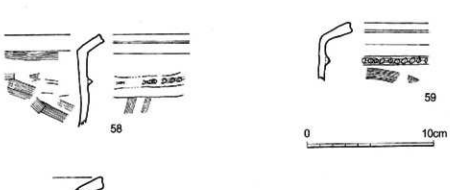
調査区中央より南東側に位置する。構造は桁行１間梁行１間の東西棟で、規模は桁行3.05～3.24m、梁行2.30～2.54mを測る。棟方向はＮ52°Ｅを指す。柱穴の掘形は0.24～0.42mの円形及び楕円形を呈する。北側の桁は中間部分に柱穴を持ち、柱間は1.48～1.75mを測る。

遺物は甕の胴部と思われる小破片が４点と壺の破片２点が出土した。72は壺の口縁部である。鍔先状の口縁部で内外面ともナデ調整である。

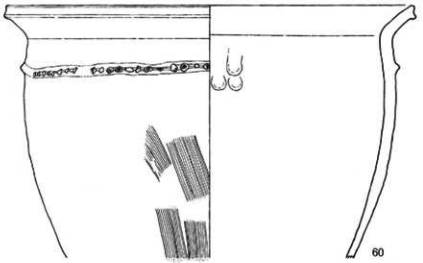


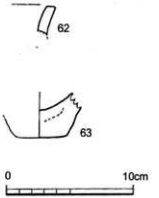
1. 黒褐色土　少々軟質で根のカクランを多く受ける
2. 灰褐色土　硬質
3. 褐色土　軟質　(柱穴の埋土)
4. 黒褐色土　軟質でアカホヤのブロックが混じる(土杭植栽痕)
5. 灰褐色土　軟質でアカホヤのブロックが混じる(土杭植栽痕)
6. 黒灰色土　少々軟質でアカホヤのブロックが多く混じる
7. 淡灰色土　少々硬質でアカホヤや褐色土のブロックが混じる(土杭埋土)
8. 黒褐色土　少々硬質でアカホヤや褐色土のブロックが混じる(土杭埋土)

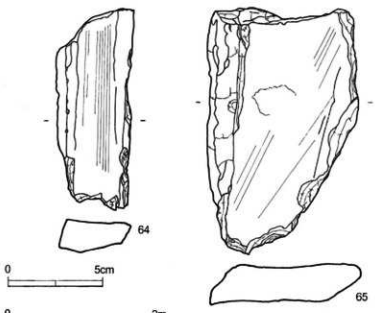
第24図　ＳＡ２及びＳＺ６７実測図（1／50）

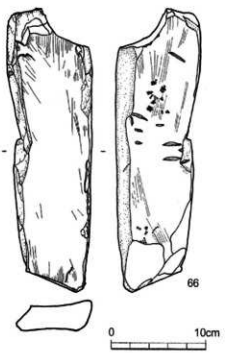


第25図　ＳＡ２出土遺物実測図（1／3）

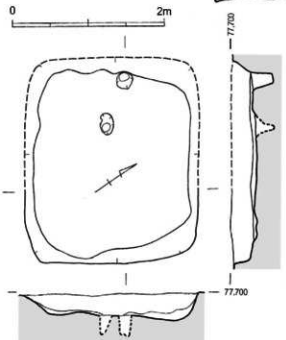




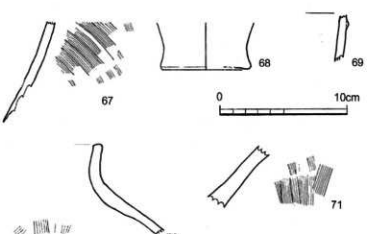




第26図　ＳＡ２及びＳＺ６７出土遺物実測図



第27図　ＳＡ３実測図（1／50）



第28図　ＳＡ３出土遺物実測図（1／3）

3　その他の遺構

ＳＺ68（第33図）

調査区中央に位置する。0.25～0.46mの小穴や0.52から～0.98mの土坑が、半径３mほどの円内に配置され、それぞれの長軸はほぼその円の中心方向を向く。検出面からの深さは、最深部で0.2mを測る。遺物も、半径４mほどの同心円内で、遺構検出面直上からその上0.3mまでの範囲内に集中して出土した。前述のように検出面が本来の遺構の上端より低くなっている可能性もあり、竪穴住居で何度も建替えた跡とも考えられる。しかしながら、竪穴住居と想定すると、出土遺物からは他の遺構の遺物や包含層遺物と大きな時期差は見られないが、円形基調のプランで直径が６～７mほどの大型のものになり、検出できた３軒の竪穴住居とは異なるため、明確な性格付けを行えなかった。

遺物（第34，35図）は甕（73～75）、壺（76～77）、鉢（78）が出土した。73は、口縁が「く」の字に外反し、口縁下に１条の刻目突帯を貼り付けたいわゆる中溝タイプの甕である。74と75は、口縁が「く」の字に外反するものの、突帯を持たない甕である。76は肩部に４条の低い三角突帯を施し、その下に円形浮文を貼り付けている。77は口縁が外反し、頸部と最大径になる胴部に突帯を貼り付けた大型の壺である。78は口縁が内湾し、口唇部が厚めに成形されている

4　包含層遺物

第36図から第40図に弥生時代の包含層出土遺物を図示した。

土器

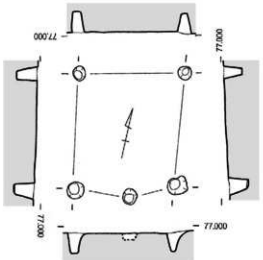
79から96は口縁部や胴部に突帯を持つ甕である。79～82は口縁部が直口し、口縁直下に刻目突帯を持つ、いわゆる下城式甕である。79と80は口縁外端部を摘みだして小さく突出させ、刻目を施している。83～85は口縁外面に突帯を貼り付け、突帯の断面を台形状に整えたもので、85と86は比較的大型の甕である。87～96は口縁が外反し、口縁下に突帯を廻らせたものである。87～95は口縁が「く」の字に外反し、口縁下に１条の刻目突帯を廻らせた、いわゆる中溝タイプの甕である。95は突帯に刻目を施したときの布目圧痕が看取できる。94は突帯直上に、おそらく補修孔と思われる穿孔がある。96は比較的大型の甕で、口縁が「く」の字に外反するが、刻目突帯ではなく、断面を台形状に整えた突帯を貼り付けている。

97～101は突帯を持たない甕で、口縁が「く」の字に外反し、内面に稜線を形成するもので、肩部は張らずに中溝タイプと同様に最大径が口縁部分になる。102は口縁が「く」の字に短く外反し、口縁端部を上下に突出させ、端面に２条の凹線を施すもので、甕では稀な瀬戸内系の土器である。

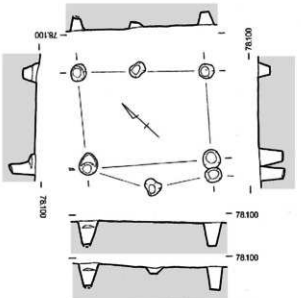
103～109は甕の底部である。109以外はわずかに上げ底を呈し、端部が外反する。

110～117は口縁部が朝顔形に開く壺である。110は口縁の内外面に粘土を貼り付け鍬先状に成形し、上面に円形浮文を貼り付け、口唇端面に篦描鋸歯状文を施している。112は鍬先状ではないが、やはり上面に円形浮文、口唇端面に篦描鋸歯状文を施している。113は口唇端部を上下に拡張させ、口唇端面に篦描鋸歯状文を施している。114は口唇端面に竹管による連続刺突文を施している。116は口縁外面に２条の沈線を施し、117は口唇部に強い横ナデで浅い凹を作っている。

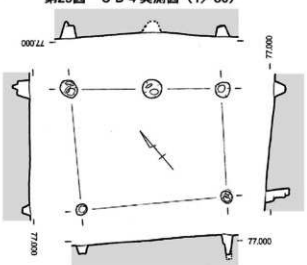
118は口縁部が短く外反する短頸壺である。119は口縁部が内傾し、穿孔を施した無頸壺で、外面はミガキによる調整がなされている。121は口縁部が外反気味に開く長頸壺で、内面はミガキ、外面はハケ目調整の後、ミガキが施されている。120は口縁外面に突帯を貼り付けた厚手の壺で、ヘラミガキによ



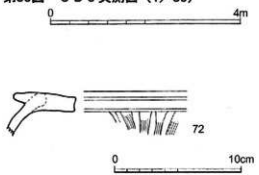
第29図　ＳＢ４実測図（1／80）



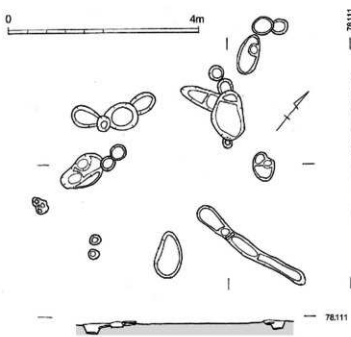
第30図　ＳＢ５実測図（1／80）



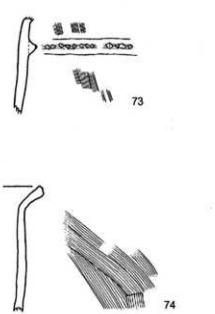
第31図　ＳＢ７０実測図（1／80）



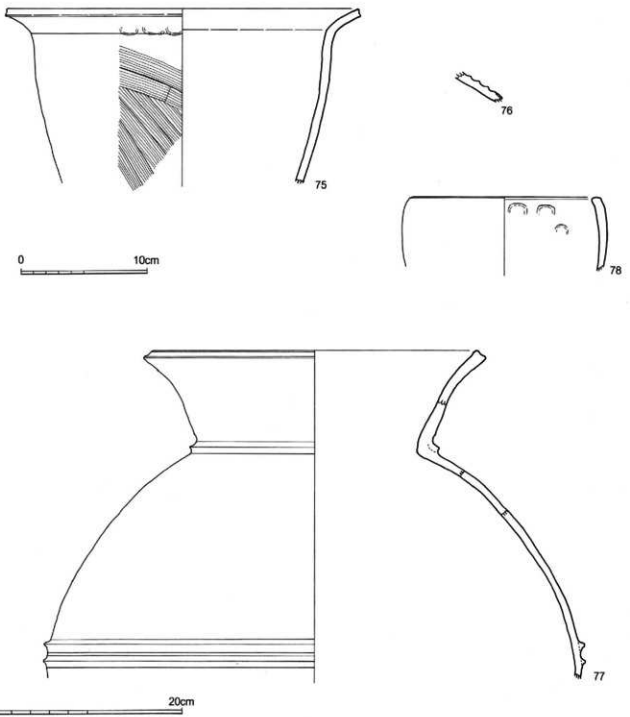
第32図　ＳＢ７０出土遺物実測図（1／80）



第33図　ＳＺ６８実測図（1／80）



第34図　ＳＺ６８出土遺物実測図(1)（1／3）



第35図　ＳＺ６８出土遺物実測図(2)　(77：1／4　その他：1／3)

る調整。

122～126は口縁端部を上下に拡張し、口唇端面に２条又は３条の凹線を施した瀬戸内系の壺である。中でも123は胎土が混入物が少なくて緻密であり、当遺跡の遺物の胎土とは異なる。

127～132は壺の頸部及び胴部である。127は朝顔形に開く口縁に続くもので、２条の突帯を貼り付け、上の突帯には刻目を施している。128は肩部に３条の沈線を施している。129は肩部に３条、さらに胴部の最大径となる部分に２条の突帯を貼り付けている。130と131は胴部が球形を呈し、突帯を２条又は４条貼り付けている。132は長頸壺の胴部で、そろばん玉状に強く張り出し、最大径となる部分を強くなでて浅い凹を形成してしている。さらにその上部に円形浮文を貼り付けている。

133～135は壺の底部である。いずれも平底を呈しているが、133は胴部径に比べ、底部径が小さい。

136は比較的小形の鉢で、内外面ともナデによる調整がなされている。137は口縁内部が鍔先状の高坏の坏部である。138は鐸形土製品である。中を中空にし、頭頂部を強くつまみ上げ、そこに穿孔を施している。

石器

139と140は鱗片性頁岩の磨製石鏃である。成品は２点であるが、同じ石材の未成品（141～150）も10点出土している。151～153は頁岩製の砥石である。151は両面、152と153は片面の使用した研磨痕が見られる。154は頁岩製の敲石である。形状が三角形であるがその頭頂部３箇所に敲打痕が見られる。155は砂岩製の磨石で、両面に擦痕が見られる。

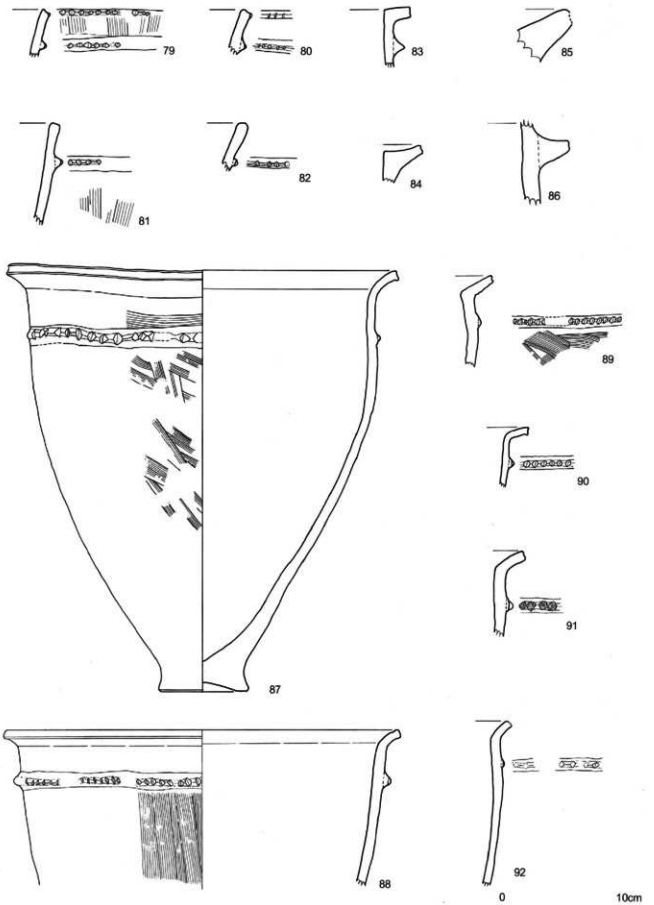
第６節　まとめ

西畦原第１遺跡では旧石器時代、縄文時代早期、弥生時代の３つの時代の遺構・遺物が確認された。

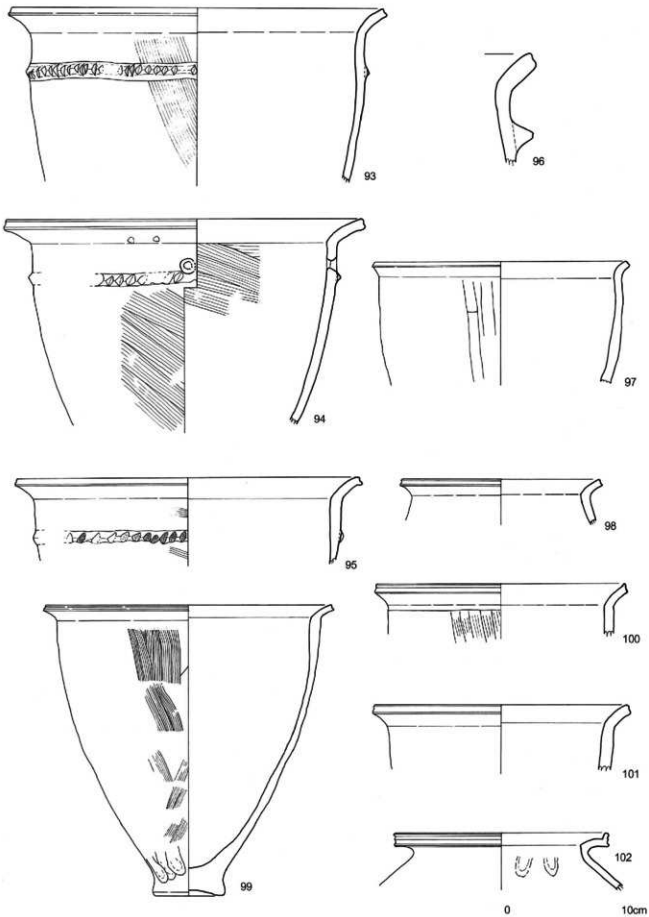
旧石器時代については３基の礫群を検出し、剥片を含めると28点の石器が出土した。小林軽石を含む層（Ⅶ層）で調査区を北西から南西に流れる谷を中心に幅50cmを越す尾鈴山酸性岩の巨礫が流れ込んでいるが、礫群については出土状況や石材・赤化状況などから考えて流れ込みではなく人為的なものである。しかしながら出土した遺物は全く接合関係がなく、流れ込みの可能性も高い。

縄文時代早期については３基の集石遺構と２基の土坑を検出した。集石遺構についてはいずれも小規模で掘り込みもなく散礫と表現した方が的確であろう。ＳＣ201については前述のように陥し穴の可能性がある。隣接する西畦原第２遺跡でも４基の陥し穴が検出されていること、本遺跡Ⅳ層からの遺物で打製石鏃が32点出土することなどから、谷部の湧水に集まる動物を対象とした狩猟の場であったのではないかと想像できる。

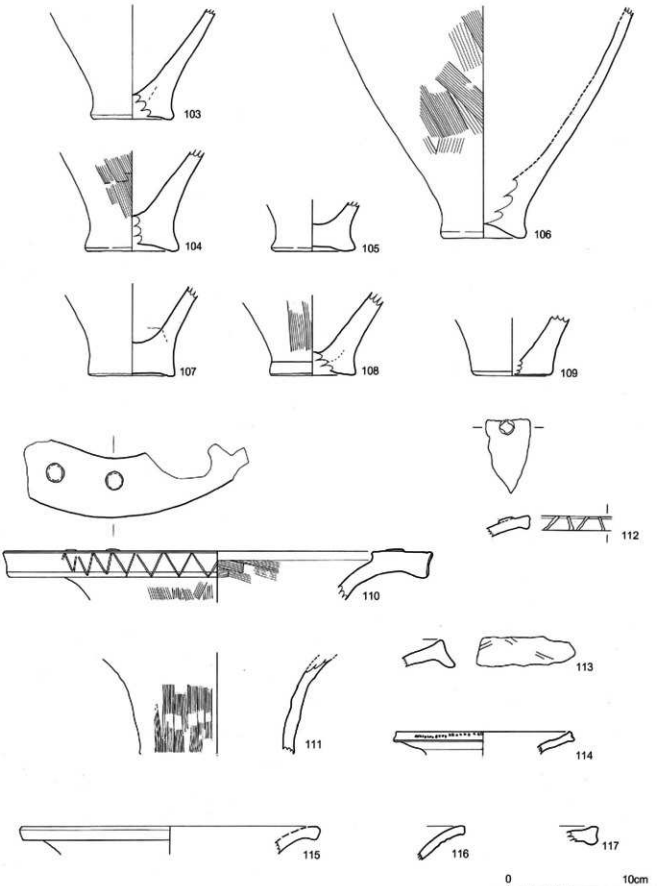
弥生時代については中期末から後期初頭にかけての竪穴住居３軒、掘立柱建物３棟、不明遺構２基を検出した。土器の出土状況を見ると、口縁が鍔先状に成形され円形付文を貼り付けた須玖式の流れを汲む壺・くの字口縁と口縁下位の突帯を特徴とするいわゆる中溝式の甕のほか瀬戸内系の口縁に凹線文の入った壺・甕が少数ながら本遺跡でも確認されたことにより、八幡上遺跡や銀代ケ迫遺跡・新田原遺跡と同時期（弥生中期末～後期初頭）に営まれた遺跡と考えられる。また、同時期の遺跡で近接する新田原遺跡で見られた花弁状住居は、今回の調査では検出されなかった。また、黒色土中において土器が集中する箇所が見られることや柱穴の分布に偏りがあることなどから、遺構検出面であるアカホヤ上面まで掘り込まれない遺構の存在は確実であると思われるが今回の調査では明らかにできなかった。ＳＡ２・



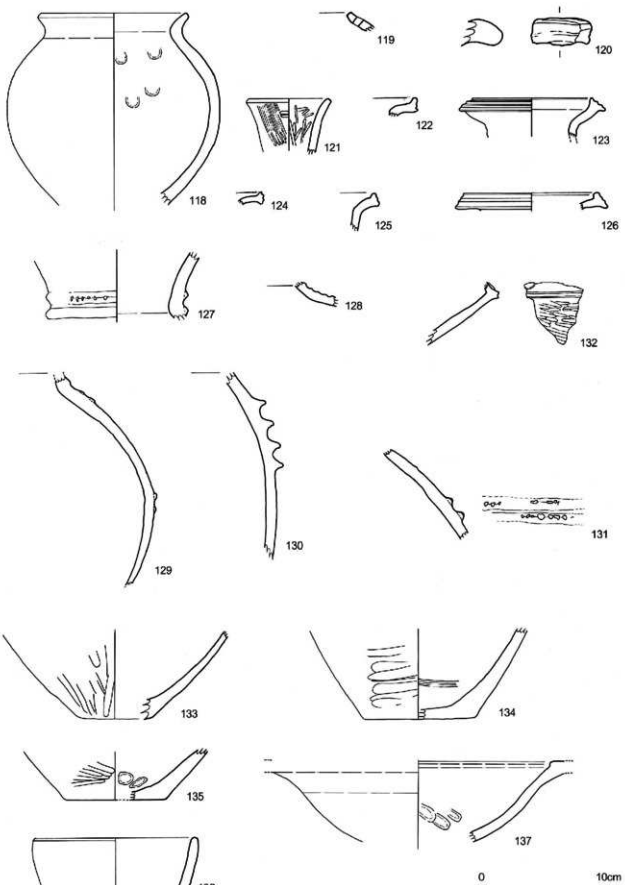
第36図　包含層出土遺物実測図(1)　(1／3)



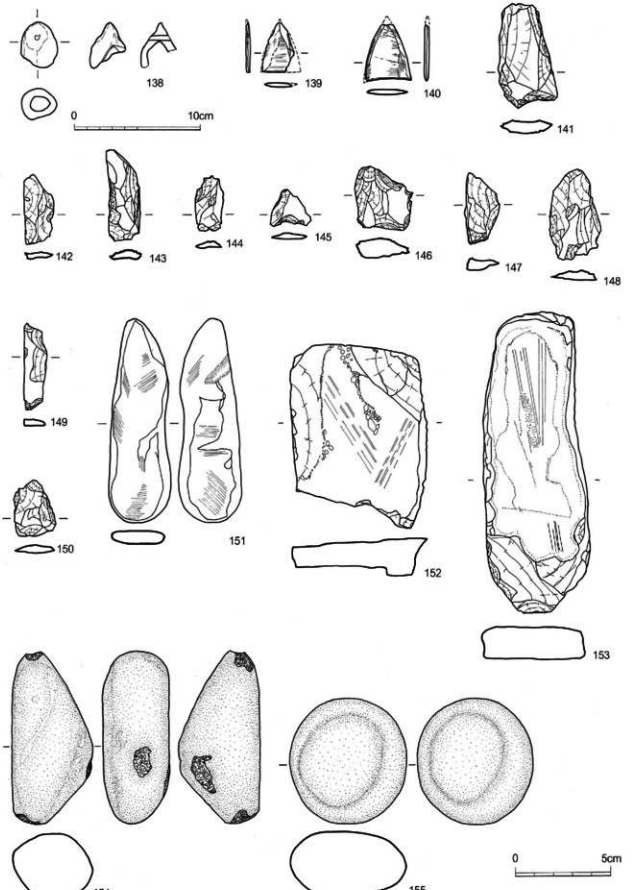
第37図　包含層出土遺物実測図(2)　(1／3)



第38図　包含層出土遺物実測図(3)　(1／3)



第39図　包含層出土遺物実測図(4)　(1／3)



第40図　包含層出土遺物実測図(5)　(138：1／3　その他：1／2)

ＳＺ６７とした遺構については、西畦原第２遺跡検出のＳＡ２（本書掲載）と時期差はあるが、方形の遺構の角周辺に複数の土坑が掘り込まれ、全体としては不定形を呈するなど類似点が多い。本遺跡では二つの遺構の切り合いとしたが、時期差を示すような遺物が見られないことや西畦原第２遺跡では住居が埋まる途中で掘り込まれていることが確認されており、大きな時期差はないと考えられる。住居との関係やどのような理由で土坑が掘削されるのかなど今後検討していく必要がある。

註

(1)「八幡上遺跡」・「銀代ケ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集　新富町教育委員会　1992年
(2)「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第４集 新富町教育委員会　1986年

西畦原第２遺跡Ｄ区の調査

第３章　西畦原第２遺跡Ｄ区（鬼界アカホヤ火山灰層上面）の調査

第１節　調査の概要

「第１章　第１節調査に至る経緯」で述べたように、本来この調査区の北東側3,000㎡を西畦原第１遺跡の第二次調査として開始したが、西畦原第２遺跡との境界部分で住居端部を検出したために調査区を拡張し、名称も西畦原第２遺跡Ｄ区に変更した。

本調査区は三財原段丘面が南西から北東にかけて低くなる斜面に位置し、大量の盛土が敷かれ途中まで平場が造られ、宅地や竹林、荒れ地となっていた。また、調査区北側は西畦原第１遺跡へと続く谷地形となっていて、湧水地や井戸が見られた。

盛土部分や表土については重機で撤去したが、竹林部分は文化層へのダメージを最小限に押さえるために、人力によって伐採及び抜根を行った。

谷地形部分は確認調査で検出された硬化面の面的な広がりを確認するとともに、弥生時代の文化層の確認を主眼に行った。硬化面については高原スコリア層下で検出されたが、確認調査で出土した弥生土器の小片は谷地形への流れ込みと考えられ、弥生時代の遺構は検出できなかった。

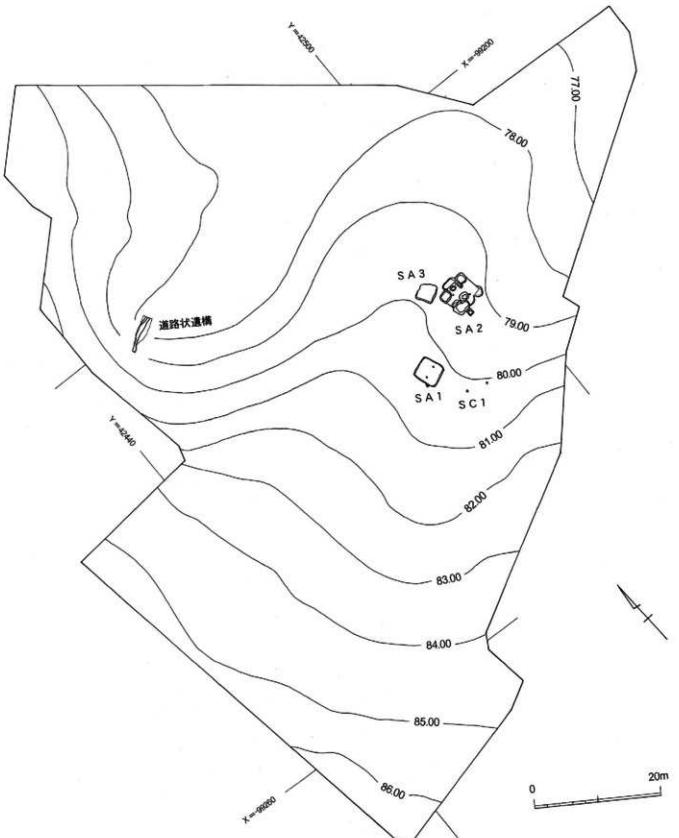
斜面部分は攪乱が激しいものの、黒色土層（Ⅱ層）とその下の鬼界アカホヤ火山灰層（Ⅲ層）はほぼ全面で残存していた。しかしながら遺構の広がりは当初の予想に反し、斜面の東側部分にとどまり、包含層遺物も調査区南側に走る小さな谷に集中してみられたにすぎなかった。

第２節　基本層序

今回の調査は鬼界アカホヤ火山灰層上までであるが、下層についても、斜面部分の北東側と谷地形の部分の北西側にそれぞれトレンチを入れて観察した。

斜面部分は前述の西畦原第１遺跡の基本土層とほぼ同じで、北東側の斜面端部を除くと堆積状況は良好である。反面、調査区北東の谷地形部分は表土下に一部高原スコリアが確認できたものの鬼界アカホヤ火山灰層直下の黒褐色土層（Ⅳ層）以前については湧水のために確認できなかった。

第41図　西畦原第２遺跡Ｄ区　基本土層図



第42図　西畦原第２遺跡Ｄ区遺構分布図（1／60）

第３節　弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物

１　竪穴住居

ＳＡ１（第43図）

調査区中央よりやや東側の段丘斜面部の下位に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長軸3.90m、短軸3.75mで長軸方位はＮ13°Ｗを指す。検出面から床面までの深さは最深部で0.45mを測り、貼床を有し、２本の主柱穴が確認された。住居の北東部には最大長約20cm最大径約8.0cmの炭化材が床面で、住居の中心方向へ向く形で検出された。中心方向の方が径が細く、中には枝分かれした部分の炭化物も見られた。これらを自然科学分析のＣ14年代測定と樹種同定にかけたところＡＤ110～120年という暦年代と、コナラ属クヌギ節とスジダイの２種類に同定された。炭化物が集中する床面に直径約0.15m、東壁際の床面に直径約0.15mと0.30mの焼土が見られた。なお、西壁に直径約0.36m、検出面から床面までの深さ約0.56mの小穴が検出されたが、この住居に伴うものであるかは不明である。

遺物（第44、45図)は、貼床直上だけではなく、埋土の上位層からの出土も多く、甕（１～５)、壺（６～12)、鉢（13)、高坏（14)、石器（15～18)、鉄器(19・20）などが出土した。

１と２は口縁部が「く」の字に外反して大きく開く。１は内外面ともナデによる調整であるが、２は外面にタタキ、内面にハケ目を施している。３は丸みのある胴部に最大径を持ち、内湾気味に延びる甕であるが、かなり傾いたいびつな形である。４と５は平底の甕の底部で、４は外面にタタキが施されている。６と７は口縁部が大きく外反する壺。内面口縁端部に粘土を貼り付けている。８は平底の壺の底部、９～12は丸底の壺の底部である。いずれもナデ調整で接地部分が少し厚くなっている。13は比較的小型の鉢の口縁部で端部が非常に薄くなっている。14は高坏の坏部で屈曲部に明瞭な稜があり、内外面ともミガキが施されている。

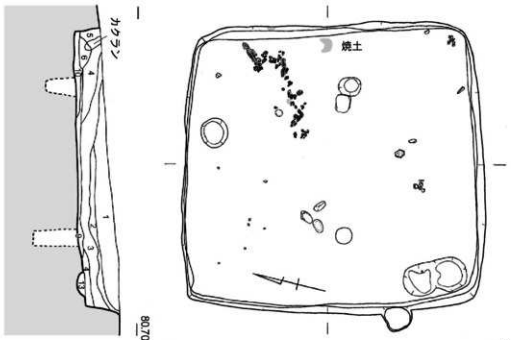
15は尾鈴山酸性岩製の中央に窪みのある石皿である。貼床面上で出土しており、側面は一部被熱により変色し剥離している。16は砂岩製の磨石で、側面には敲打痕も見られ、敲石としての使用も看取できる。17はホルンフェルス製、18は頁岩製の方形両端抉りの石庖丁である。17はかなり使用され薄くなっている。18は母岩から剥ぎ取り、その自然面を研磨しているが、剥離面はごく簡単に研磨されただけで刃部のみを作り出している。

19と20は鉄器であるが、どちらも錆膨れが激しく、鉄鏃の可能性もあるが器種は不明である。

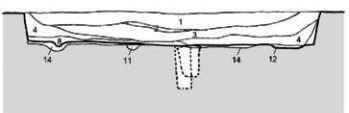
ＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９（第46図）

ＳＡ２は調査区中央よりやや東側の段丘斜面部の端部に位置する。平面プランは方形基調のプランを呈し、北西部と南西部に２か所の張り出し部を有するものと推定される。長軸は5.50m、短軸5.10mで長軸方位はＮ78°Ｅを指す。検出面から床面までの深さは最深部で0.48mを測り、貼床を有し、４本の主柱穴が確認された。土層から考察するとＳＣ１～ＳＣ９までの９基の土坑と切り合いが見られる。住居中央部に長軸約0.85m、短軸0.65mの楕円形状に焼土が見られる。焼土はこの他６か所で検出され、後述するＳＣ７の焼土は最大で長さ約1.2m、幅約0.22mの帯状になっている。この焼土に伴って炭化材も多く見られ、最大長約20cm、最大径約６cmほどの太さのものもある。しかし、ＳＡ１の炭化材のように検出状況に規則性は見いだせない。ＳＡ１同様自然科学分析の結果、ＡＤ90～220年という暦年代とハンノキ属ハンノキ節、コナラ属クヌギ節という樹種同定を得た。

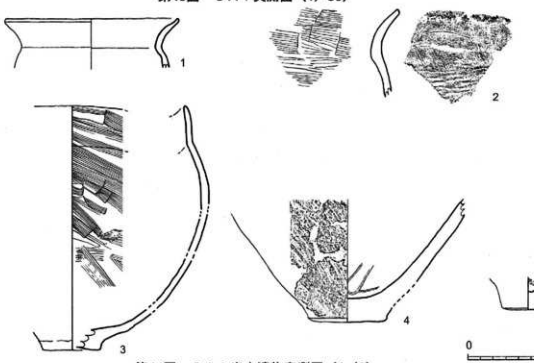
ＳＣ１はＳＡ２内の西角に位置し、ＳＡ２を切っている。平面プランは隅丸方形を呈し、長軸1.75m、



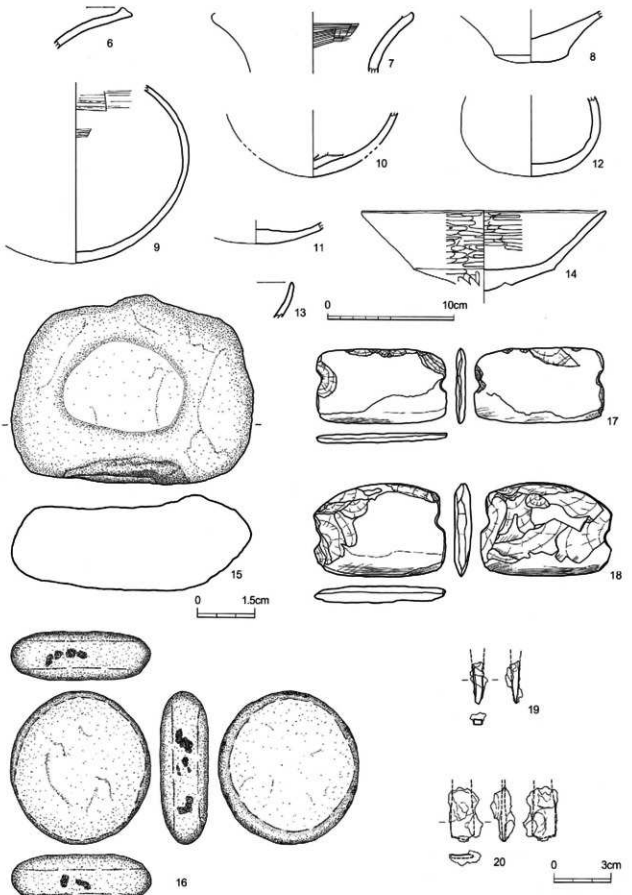
1 黒色土（10YR1.7/1）ややしまりあり　粘性なし　5cm大の土器が取り込むように入っている
2 黒色土（10YR2/1）　ややしまりあり　粘性なし　1mm以下の褐色土粒（10YR5/6）を含む
3 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　粘性なし　1～2cm礫の褐色土粒（10YR5/6）を多量に含む　特に中心部分に長さ1cm以下の焼成物を含む
4 黒褐色土（10YR3/1）しまりあり　粘性なし　1mm以下の褐色土粒（10YR4/6）を含み、その7ブロックを含む
5 黒褐色土（10YR2/3）しまりあり　粘性なし　1～2cm礫の褐色土粒（10YR4/6）を多量に含む
6 暗褐色土（10YR3/3）しまりあり　粘性なし　1mm以下の褐色土粒（10YR4/6）とそのブロックを少量含む　焼土と思われる
7 黒褐色土（10YR2/3）しまりあり　粘性なし　1mm以下の褐色土粒（10YR4/6）と1cm前のブロックを多量に含む
8 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり　粘性なし　1mm以下の褐色土粒（10YR4/6）と1cm前のブロックを多量に含む
9 暗褐色土（10YR3/3）しまりあり　やや粘性あり　1mm以下の褐色土粒（10YR4/6）を含む　5mm以下の炭化物を少量含む
10 暗褐色土（10YR3/3）しまりあり　粘性なし　1mm以下の色土粒（10YR4/6）と1cm以下のそのブロックを多量に含む
11 黒褐色土（10YR3/2）しまりあり　粘性なし
12 黒褐色土（10YR3/2）しまりあり　やや粘性あり　5mm以下の褐色土粒（10YR4/6）と1cm前のそのブロックを多量に含む　やや炭化あり
13 黒褐色土（10YR3/2）しまりあり　粘性なし　1mm以下の褐色土（10YR4/6）を含む
14 黒褐色土（10YR3/2）やや粘性あり　やや軟質　1mm以下の褐色土（10YR4/6）を含む　焼痕面と思われる



第43図　ＳＡ１実測図（1／50）



第44図　ＳＡ１出土遺物実測図（1／3）



第45図　ＳＡ１出土遺物実測図(2)　(6～14：1／3　15：1／4　16～20：1／2)

短軸1.57mで、検出面から床面までの深さは最深部で0.55mを測る。

ＳＣ２はＳＡ２内のやや北側に位置し、ＳＡ２を切っている。平面プランは楕円形を呈し、長軸1.57m、短軸約0.63mで、検出面から床面の深さは最深部で0.28mを測る。

ＳＣ３はＳＡ２内の北角に位置し、ＳＡ２を切っており、ＳＣ２から切られている。平面プランはほぼ円形で、残存部分は長軸1.86m、短軸1.51mで、検出面から床面までの深さは最深部で0.30mを測る。

ＳＣ４はＳＡ２の西角に位置し、ＳＡ２から切られており、平面プランは楕円形または隅丸方形を呈するものと推定される。残存部分は長軸1.72m、短軸約0.9mで、検出面から床面までの深さは最深部で0.27mを測る。

ＳＣ５はＳＡ２の南角に位置し、ＳＡ２を切っている。平面プランは隅丸方形を呈し、長軸2.51m、短軸1.71mで、検出面から床面までの深さは最深部で0.67mを測る。二段掘り状になっており、下段は不整形を呈する。ＳＡ２に関連する土坑の中で最も大きい。

ＳＣ６はＳＡ２の南側に接しており、平面プランは隅丸方形を呈する。長軸0.87m、短軸0.78m、検出面から床面までの深さは最深部で0.27mを測る。ＳＡ２に関連する土坑の中では最も小さい。

ＳＣ７はＳＡ２内の中央やや南東側に位置し、ＳＡ２を切っている。平面プランはほぼ円形を呈し、長軸1.57m、短軸1.25mで、検出面から床面の深さは最深部で0.57mを測る。前のように広範囲の焼土と多くの炭化物が検出された。

ＳＣ８はＳＡ２内の中央やや北西側に位置し、ＳＡ２を切っている。平面プランは円形を呈し、直径が約0.8mで、検出面から床面までの深さは最深部で0.20mを測る。

ＳＣ９はＳＡ２内の南角に位置し、ＳＡ２の貼り床面から掘り込まれており、この住居に伴うものである。また、ＳＣ５から切られており、平面プランは不整形を呈している。残存部分の長軸1.70m＋α、短軸1.18m、検出面から床面までの深さは最深部で約0.30mと推定される。

遺物は第48図～第51図に図示した。ここでは甕（21～31）、壺（32～47）、鉢（48～56）、高坏（57～60）、石器（61～66）、鉄器（67～69）が出土した。

21～25は口縁部が「く」の字に外反して大きく開く甕である。21～23は外面にタタキが施されている。26～31は甕の平底の底部であるが、29を除いてすべて外面にタタキが施されており、特に26と31は底部までタタキが施されている。29は底部付近を指押さえによって成形している。32と33は、短く外反する口縁で、頸部に貼付突帯を持つ壺である。32の貼付突帯には３条の横方向の沈線の上から斜めの刻目が、33では斜方向の沈線によって格子状の刻目が施されている。34は外反する口縁部の端部が薄くなり、内外面ともにハケ目が施されている。35と36は同一個体で、小型の短頸壺で平底である。37は長頸壺の口縁部で、外面にハケ目の後ミガキが施されている。38～42は複合口縁の壺である。いずれも拡張部に櫛描波状文が施されているが、42は文様が簡略化されいる。43～45は比較的締まった頸部・底部と大きく張り出した胴部を持つ壺である。44は内外面ともにハケ目、45は外面にミガキが施されている。46と47は壺の底部である。46は平底であるが、47は丸みを帯びた平底を呈し、外面はタタキ調整の後ナデ消しを行っている。48～50は非常に小さな平底と広く開いた口縁部を持つ鉢である。いずれも口縁外面に細い突帯を貼り付け、外面にミガキを施している。さらに49と50は貼付突帯上部に２条の沈線を施している。51は体部は直線的に開き、口縁部付近で内湾する鉢。52と53は体部が内湾し口縁端部が外に開く鉢である。54～56は台付鉢である。54は口縁端部を薄く作り出し、内面はハケ目を施している。55と56は

台の裾部で、大きく外反して広がる。56は穿孔を有する。57～60は高坏。57は深い坏部を呈する。坏底部がわずかに内湾し、外反する口縁部が上方に延びる。58は口縁部が大きく開く。59は直線的な口縁部である。60は５つの円形透かしを持ち、裾部がラッパ状に広がる高坏の脚部である。筒部は中空でなく粘土が充填されている。高坏はいずれもミガキが施されている。

61は砂岩性の石皿である。片面に擦痕の大きなくぼみがある。62はホルンフェルス製、63は頁岩製の方形両端抉りの石庖丁である。63は表裏両面を丁寧に磨き上げているが、62は母岩から剥ぎ取り、その自然面を研磨しているが、剥離面はそのままで刃部だけ作り出している。64は頁岩製の砥石である。表裏両面に研磨痕が見える。65と66は柱穴の中から重なって出土した。65は砥石と思われるが、明瞭な研磨痕は少ない。66も形状から石庖丁として使われたものと思われるが、母岩から剥ぎ取り、自然面側を簡単に研磨して使用している。他の石庖丁で見られる両端抉りはない。

67は釣針である。ＳＣ１の壁際から出土した。釣針の根本には撚糸が残存している。68と69はＳＣ７内から出土したが、錆膨れが激しく、器種は不明である。69は金張りしているように思われる。

第52図～第54図にＳＡ２及びＳＣ１～ＳＣ９遺物出土状況並びに出土遺物の接合状況を示した。主な遺物の出土状況並びに接合状況から次のようなことが看取できる。

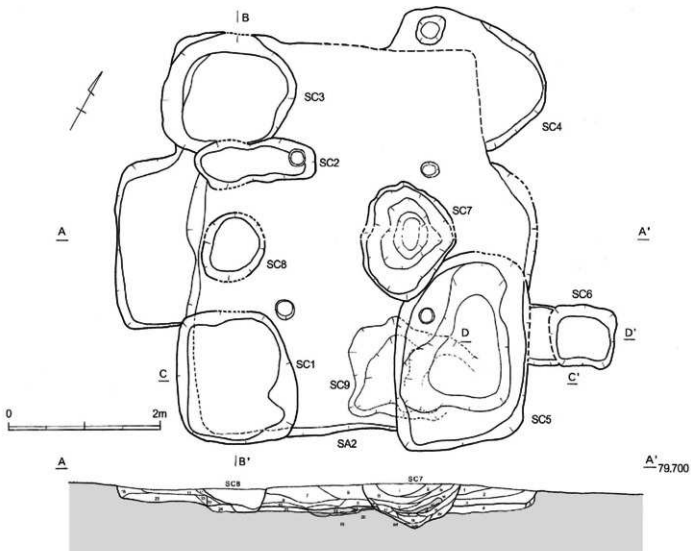
壺44はすべてＳＡ２の範囲内から出土している。接合した土器片は貼床直上か張り出し部分の床上である。したがって、この遺物は完全にＳＡ２に伴うものと考えられる。

高坏57はＳＡ２とＳＣ５の範囲の破片が接合している。いずれもＳＡ２の貼床面から0.2mほど高いレベルで出土している。この高坏の坏部は、ＳＡ２から南に12mの地点に位置するＳＣ10出土の脚部と同一個体と考えられ、流れ込みの可能性が高いと考えられる。

高台付鉢54はＳＣ５とＳＣ７の範囲の破片が接合している。ＳＣ７の範囲の遺物はＳＡ２の貼床直上と同じレベルにある。ＳＣ５中の遺物は、これはＳＡ２の貼床面からすると0.2mほど高い。

甕26はＳＡ２とＳＣ１・ＳＣ２・ＳＣ５の範囲の破片と接合している。ＳＣ５中の遺物が他のＳＡ２出土の遺物と同じように貼床直上レベルにある。ＳＣ２中の遺物は0.1m低く、ＳＣ１中の遺物は0.15mほど高い。またＳＡ１の近くのＳＣ10の土器片とも接合している。ＳＡ２の床がほとんど埋まっていない時期に流れ込んだ可能性も考えられる。

鉢51はＳＡ２とＳＣ１・ＳＣ５・ＳＣ７の範囲の破片と接合している。貼床面より高いレベルの遺物が多い。ＳＣ５やＳＣ７中の遺物は流れ込んだか、掘り込んだ際に捲き上がったかが考えられる。



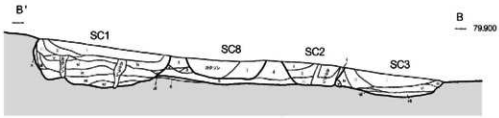
SA2

1 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり　粘性なし　アカホヤの粒を含み　1mm以下の炭化物を極少量含む
2 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり　粘性なし　アカホヤのブロックと粒を含み　1mm以下の炭化物を少量含む
3 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　地山の暗褐色（10YR3/4）のブロックを含み　土器の小片を少量含む
4 黒褐色土（10YR2/3）硬くしまる　やや粘性あり　地山の暗褐色（10YR3/4）を多量に含み　アカホヤのブロックを少量含む　貼床と思われる
5 黒褐色土（10YR2/2）あまりしまりなし　粘性なし　アカホヤの粒を多量に含む
6 黒褐色土（10YR2/2）あまりしまりなし　粘性なし　アカホヤのブロックと粒を多量に含む　1mm以下の炭化物を少量含む
7 黒褐色土（10YR2/3）ややしまりあり　粘性なし　アカホヤのブロックをまばらに含み　粒を多量に含む　1mm以下の炭化物を含む
8 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　粘性なし　アカホヤのブロックを少量と粒を含む
9 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし　粘性なし　アカホヤ粒を含む
10 黒褐色土（10YR2/3）ややしまりあり　粘性なし　アカホヤのブロックや地山の褐色土（10YR4/6）を含む
11 黒褐色土（10YR2/3）しまりなし　粘性なし　アカホヤの粒を少量含む　褐色土（10YR4/6）粒を含む
12 暗褐色土（10YR3/4）ややしまりあり　粘性なし　褐色土（10YR4/6）粒を含む
13 暗褐色土（10YR3/4）ややしまりあり　粘性なし　褐色土（10YR4/6）粒を多量に含む
14 暗褐色土（10YR3/3）しまりなし　粘性なし　褐色土（10YR4/6）粒を多量に含む
15 暗褐色土（10YR2/2）しまりなし　粘性なし　地山の褐色土（10YR4/6）粒を含む
16 暗褐色土（10YR3/3）しまりなし　粘性なし　アカホヤの粒と焼土と1mm以下の炭化物を少量含む
17 暗褐色土（10YR3/3）しまりあり　1cm以下の焼土をまばらに含む　1mm以下の炭化物を少量含む
18 暗褐色土（7.5YR3/4）しまりなし　粘性なし　1mm以下の炭化物を少量含む　焼土と地山が混ざった感じ
19 明赤褐色土（5YR5/8）硬くしまる（特に上部）　粘性なし
20 暗褐色土（7.5YR3/4）しまりなし　やや粘性あり　焼土と地山の暗褐色土（10YR3/4）が混ざった感じ
21 4と同じ
22 暗褐色土（10YR3/4）しまる　粘性なし　明褐色土（7.5YR5/8）を少量含む　この上面で土器の出
23 土が多い
24 褐色土（10YR4/6）ややしまりあり　やや粘性あり

SC7

i 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし　粘性なし　アカホヤの粒を多量に含む　5mm以下の炭化物を少量含む
ii 黒色土（10YR2/1）しまりなし　粘性なし　アカホヤの粒を含む
iii 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし　粘性なし　アカホヤのブロックを少量　粒を多量に含む　3mm以下の炭化物を極少量含む
iv 黒色土（10YR2/1）しまりなし　粘性なし　アカホヤの粒を少量含む
v 黒色土（10YR2/1）しまりなし　粘性なし　アカホヤの粒を多量に含む
vi 黒色土（10YR2/1）しまりなし　粘性なし　焼土の粒とアカホヤの粒を少量含む
vii 黒褐色土（10YR2/3）ややしまりあり　粘性なし　焼土のブロックを多量に含む　焼土は褐色（7.5YR4/6）でやや硬質　1mm以下の炭化物を少量含む
viii 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり　粘性なし　焼土の粒を含む　褐色土（10YR4/4）を少量含む
ix 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　やや粘性あり　アカホヤの粒を含む　やや硬質で光沢あり
x 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし　粘性なし　焼土の粒を含む　5mm以下の炭化物を少量含む
xi 黒色土（10YR1.7/1）しまりなし　粘性なし　地山の褐色土（10YR3/4）が少量混ざる
xii 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　粘性なし　焼土の粒を多量に含む　1mm以下の炭化物を含む　暗褐色（10YR3/4）が少量混ざる
xiii 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　粘性なし　焼土の粒を少量含む　1mm以下の炭化物を極少量含む　暗褐色（10YR3/4）が少量混ざる
xiv 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり　粘性なし　アカホヤのブロックを極少量含む
xv 暗褐色土（10YR3/3）ややしまりあり　粘性なし　焼土（5YR5/8）と地山の暗褐色土（10YR3/4）を含む
xvi 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり　粘性なし　xiと地山の暗褐色土（10YR3/4）が混ざった感じ
xvii 暗褐色土（10YR3/3）しまりなし　粘性あり　地山の暗褐色土（10YR3/4）とxiが混ざった感じ
xviii 硬くしまる　やや粘性あり　地山の暗褐色土（10YR3/4）が多量に混ざる　アカホヤの粒が極少量混ざる　硬質でやや光沢あり

第46図　ＳＡ２及びＳＣ１～９実測図(1)　(1／50)



SC1

i 黒褐色土（10YR2/1）しまりなし 粘性なし 1cmのアカホヤのブロック（7.5YR5/6）を含む
ii 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし 粘性なし 1cmのアカホヤのブロック（7.5YR5/6）を含み アカホヤの粒を多量に含む
iii 黒褐色土（10YR2/3）しまりなし 粘性なし アカホヤの粒を多量に含む
iv 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし やや粘性あり アカホヤの粒を多量に含む
v 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり やや粘性あり アカホヤのブロックや明褐色土（10YR3/3）のブロックを多量に含む
vi 暗褐色土（10YR3/3）しまりあり 粘性なし アカホヤの粒ややや硬質の暗褐色土（10YR3/3）のブロックを少量含む
vii 黒褐色土（10YR3/2）ややしまりあり 粘性なし アカホヤの粒を多量に含む
viii 暗褐色土（10YR3/3）ややしまりあり やや粘性あり アカホヤのブロックを含む
ix 黒褐色土（10YR2/3）ややしまりあり やや粘性あり アカホヤのブロックと暗褐色土（10YR）粒を多量に含む
x 暗褐色土（10YR3/4）しまりなし 粘性なし 地山の暗褐色土（10YR4/4）のブロックを少量含む
xi 暗褐色土（10YR3/4）しまりなし 粘性なし アカホヤの地山の暗褐色土（10YR3/4）を多量に含む
xii 暗褐色土（10YR3/3）ややしまりあり 粘性なし 褐色土（10YR4/4）のブロックを少量含む
xiii 暗褐色土（10YR3/3）やや硬質 粘性あり 褐色土（10YR4/4）のブロックや明褐色土（7.5YR5/6）の粒を少量含む 粘炭と焼われる
xiv 暗褐色土（10YR3/4）しまりなし 粘性なし 通が地山の褐色土（10YR4/6）に浸みた感じ
xv 褐色土（10YR3/2）やや硬質 やや粘性あり アカホヤと褐色土（10YR2/2）を含む
xvi 暗褐色土（10YR3/4）ややしまりあり 粘性なし 地山の褐色土（10YR4/6）に黒褐色土が浸みた感じ

SC2

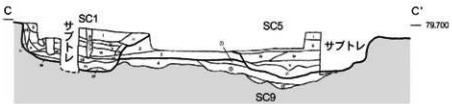
i 黒褐色土（10YR2/3）しまりなし 粘性なし アカホヤの粒（7.5YR5/6）を少量含む
ii 黒褐色土（10YR2/3）しまりなし
iii 黒褐色土（10YR2/3）しまりなし 粘性なし アカホヤの粒を多量に含む

SC3

i 黒褐色土（10YR3/2）ややしまりあり 粘性なし アカホヤのブロック（7.5YR5/6）を多量に含む
ii 黒褐色土（10YR3/2）ややしまりあり 粘性なし アカホヤの粒と1mm以下の炭化物を少量含む
iii 黒褐色土（10YR3/2）しまりなし 粘性なし 地山の褐色土（10YR4/6）を少量含む
iv 黒褐色土（10YR3/2）しまりなし 粘性なし アカホヤの粒を多量に含む
v 黒褐色土（10YR3/4）しまりあり やや粘性あり 3mm大の暗褐色土（10YR3/4）のブロックを含む
vi 黒褐色土（10YR3/2）ややしまりあり やや粘性あり 褐色土（10YR4/6）を含む

SC8

i 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり 粘性なし アカホヤのブロック（7.5YR5/6）と暗褐色土（10YR3/4）のブロックを含む

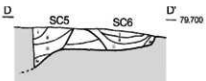


SC5

i 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり 粘性なし アカホヤの粒（7.5YR5/6）を多量に含む
ii 黒褐色土（10YR2/2）ややしまりあり 粘性なし アカホヤのブロックと粒を多量に含む
iii 暗褐色土（10YR3/3）ややしまりあり 粘性なし アカホヤの粒を多量に含む
iv 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり 粘性なし アカホヤのブロックを含む
v 黒褐色土（10YR2/3）上部が硬くしまる やや粘性あり 褐色土（10YR4/4）のブロックとアカホヤブロックを多量に含む
vi 黒色土（10YR1.7/1）しまりなし やや粘性あり 褐色土（10YR4/4）のブロックとアカホヤブロックを含む

SC9

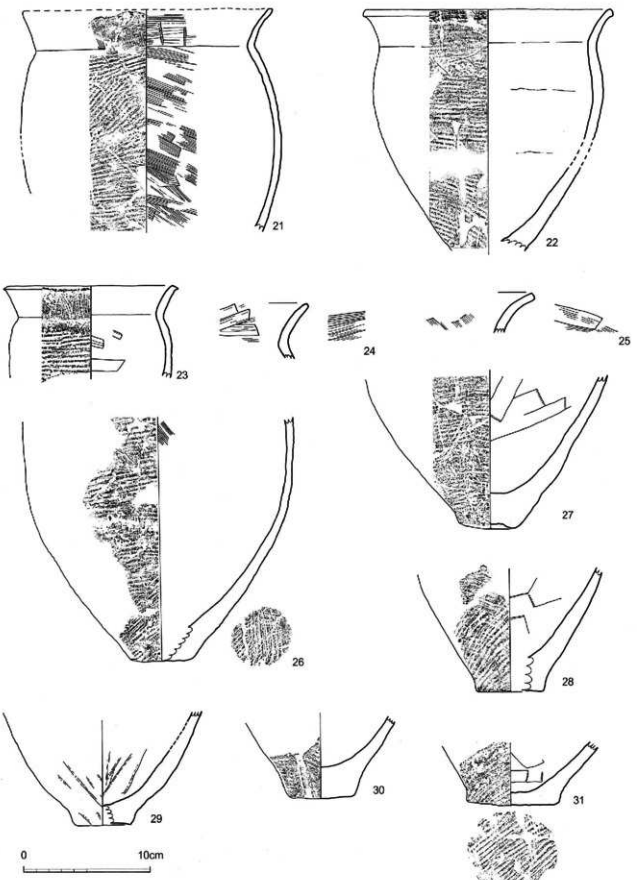
① 暗褐色土（10YR3/4）上部が硬くしまる 粘性なし 褐色土（10YR4/4）を多量に含み アカホヤのブロック（7.5YR5/6）を少量含む
② 黒褐色土（10YR2/2）しまりあり やや粘性あり 褐色土（10YR4/4）のブロックを多量に含み アカホヤブロックと粒を少量含む
③ 暗褐色土（10YR3/4）ややしまりあり 粘性なし 褐色土（10YR4/4）のブロックを少量含む



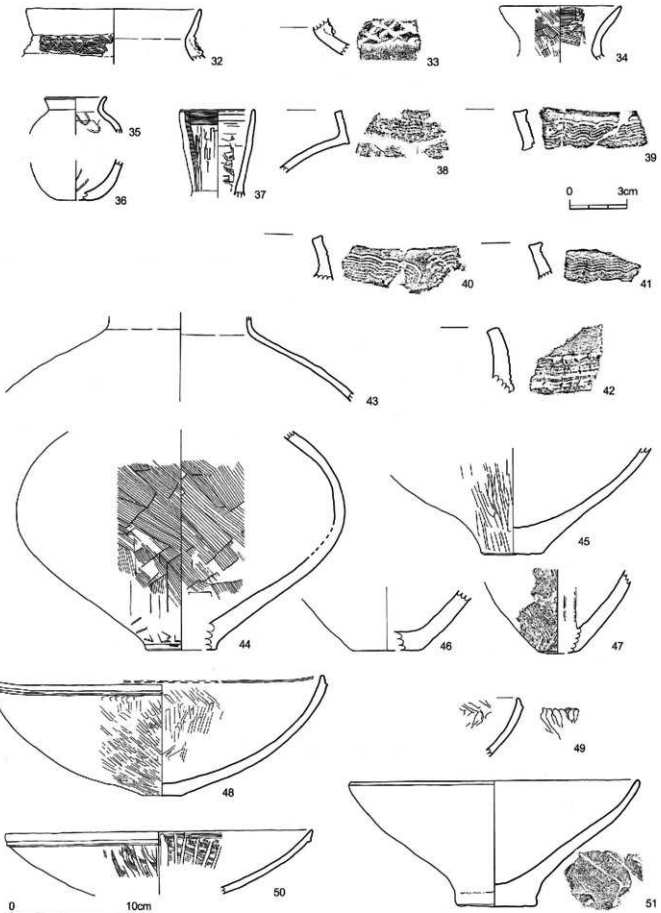
SC5

i 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし 粘性なし アカホヤの粒（7.5YR5/6）を多量に含む
ii 黒褐色土（10YR2/2）しまりなし 粘性なし アカホヤ粒を多量に含み ブロックも少量含む
iii 黒褐色土（10YR2/3）ややしまりあり 粘性なし アカホヤの粒とブロック含む
iv 暗褐色土（10YR3/3）しまりなし 粘性なし アカホヤの粒を含む

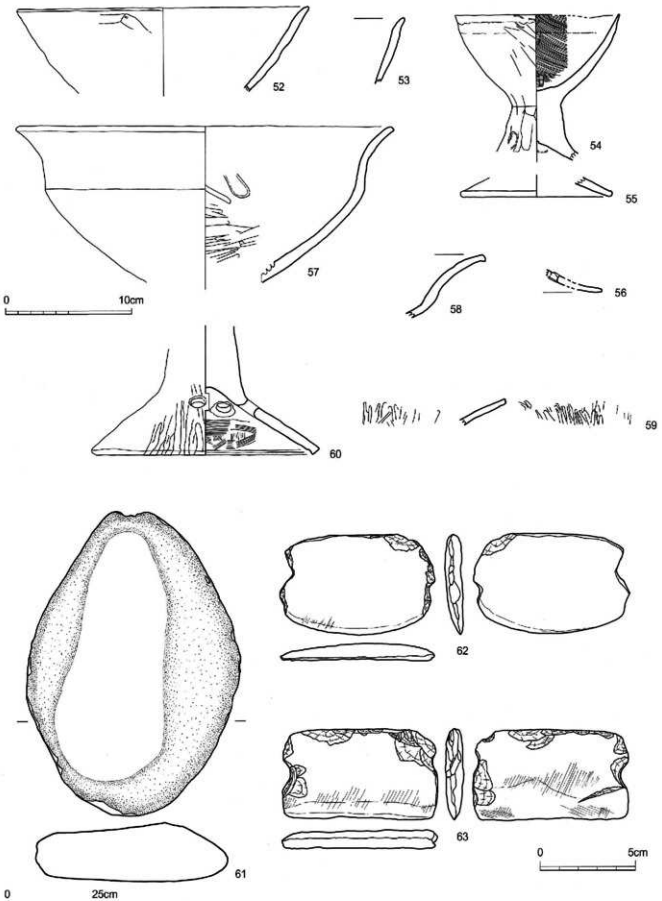
第47図　ＳＡ２及びＳＣ１～９実測図(2)　(1／50)



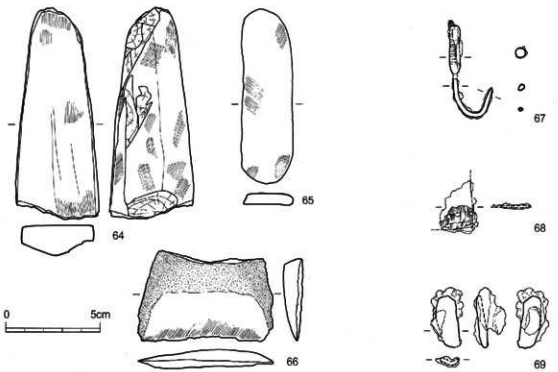
第48図　ＳＡ２及びＳＣ１～９出土遺物実測図(1)　(1／3)



第49図　ＳＡ２及びＳＣ１～９出土遺物実測図(2)　(38～42：1／2　その他：1／3)



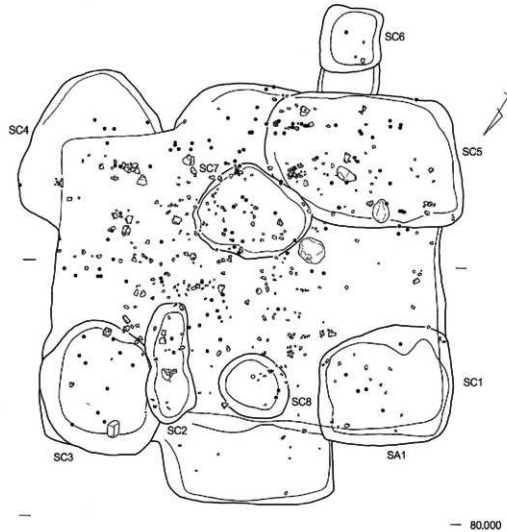
第50図　ＳＡ２及びＳＣ１～９出土遺物実測図(3)　(52～60：1／3　61：1／4　62～63：1／2)



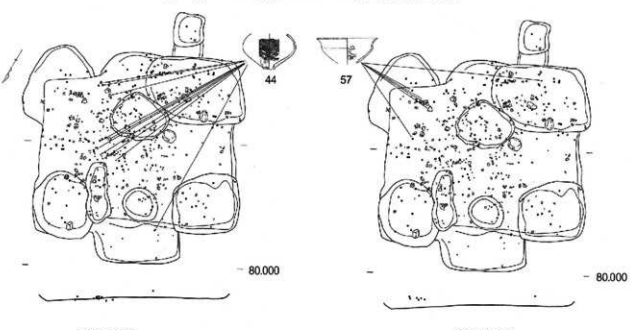
第51図　ＳＡ２及びＳＣ１～９　出土遺物実測図(4)　(1／2)

壺27はＳＡ２とＳＣ２・ＳＣ５、さらにＳＡ１の中の埋土中の遺物と接合している。ＳＣ２中の遺物は貼床面よりも最高0.1m低い。

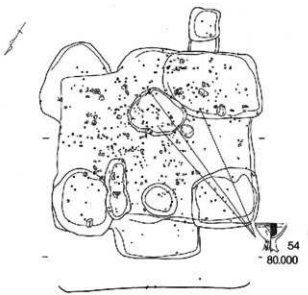
ＳＣ２、ＳＣ５は、ＳＡ２埋没後に掘られたものであるが、住居跡の角を意識して掘っていると思われることと土器の接合からみて遺構間の時間差は殆どないと思われる。一方、ＳＡ１の土器片とＳＡ２の土器片が接合しているが、二つの遺構が同一緩斜面上にあるので流れ込みの可能性も否定できないことから、遺構の時期につては特定できなかった。



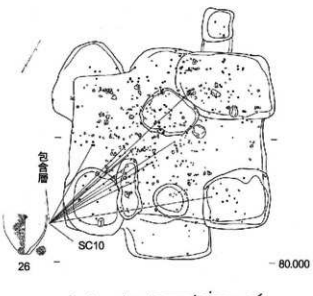
第52図　ＳＡ２及びＳＣ１～９出土遺物出土状況



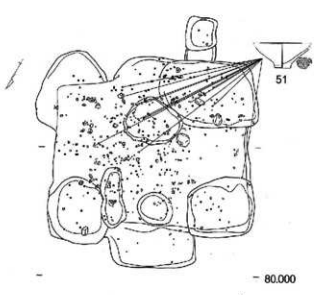
第53図　ＳＡ２及びＳＣ１～９出土遺物接合状況



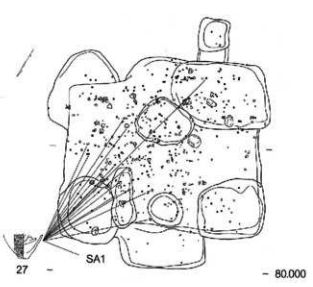
接合状況③



接合状況④



接合状況⑤



接合状況⑥

第54図　ＳＡ２及びＳＣ１～９出土遺物接合状況(2)

ＳＡ３（第55図）

調査区中央よりやや東側の段丘斜面部の端部、ＳＡ２の西隣に位置する。削平によって残存状態が非常に悪く、北東部は壁が残存していないが、平面プランは隅丸方形を呈すると推定される。長軸2.94m、短軸2.84m、長軸方位はＮ64°Ｅを指す。検出面から床面までの深さは最深部で0.11mを測る。柱穴は検出できなかった。ほぼ中央部に直径0.15mほどの焼土が検出された。

遺物は平底で口縁部が外反して広く開く甕70が出土した（第56図）。これは住居床面の北西側に直径約0.3mの範囲に小破片が集中する状態で出土した。外面にタタキ、内面にハケ目が施されている。頸部下付近に帯状に朱色に変色している。粘土の成分中に鉄分が多いと発色するが、それとは異なっており、内外面の変色部分もずれている。器種が甕ということもあり、考えにくいが赤彩の可能性も否定できない。また、この他に破砕した赤化礫が多数出土した。

２　土坑

ＳＣ10（第57図）

調査区中央よりやや東側の段丘斜面部の下位のＳＡ１から南東側約５ｍのところに位置する。直径約0.4mで、検出面から床面までの深さは約0.4mを測る。ここから南東側0.38mのところに直径約0.78m、検出面から床面までの深さ約0.2mの小穴、前述のＳＡ１の西壁の小穴が検出されたが、これらとの距離や数、形状などから掘立柱建物や竪穴住居の柱穴とは言い難く、このＳＣ10の性格も不明である。

遺物は高坏の脚部71が出土した。６つの円形透かしを持ち、裾部はやや内湾し、ロート状を呈する。筒部は中空でＳＡ２出土の高坏の脚部60とは異なる。しかし、ＳＡ２出土の高坏の坏部57と同一個体である可能性が高い。また、甕の胴部片３点が出土したが、これはＳＡ２出土の甕26と接合した。

３　包含層遺物（第58～59図）

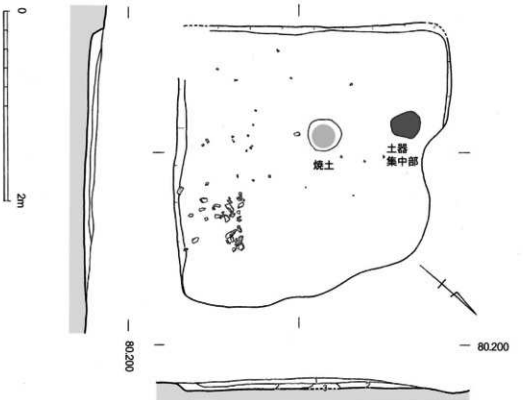
土器

甕（72～74）、壺（75～83）、鉢（84～88）、高坏（89～90）が出土した。

72～73は口縁部が外反し広がる甕である。73は口唇部が面取されている。74は口縁部がさほどくびれず、口縁部径が最大になると思われる。75と76は同一個体で、朝顔形に大きく開く口縁部を持ち、肩が張り、胴部上部が最大径となる壺である。唯一谷地形部分から出土したものである。78は口唇部に２条の凹線文を施した瀬戸内系の壺である。79と80は複合口縁壺である。79は拡張部に篦描鋸歯状文と左下がりの沈線が、80は簡略化された櫛描波状文が施されている。83は丸底の壺である。84と85は体部がわずかに内湾する鉢である。86は口縁部が内湾する鉢である。内面はナデの後ミガキが施されている。87と88は台付鉢である。88は脚部に穿孔を持つ。89は口縁部が屈曲部から緩やかに外反する高坏の坏部で、内外面ともハケ目は施されている。90は比較的浅めの坏部を持つ高坏で、内外面ともハケ目の後ミガキが施されている。

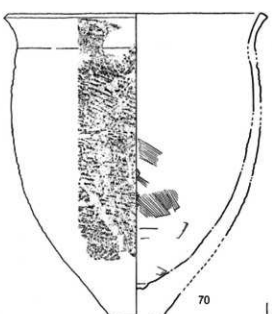
石器

91はホルンフェルス製の敲石である。端部にかなりの敲打痕が見られる。

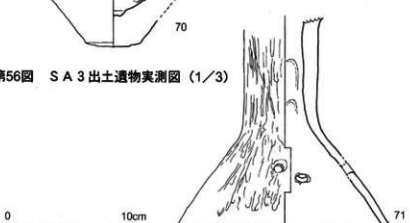


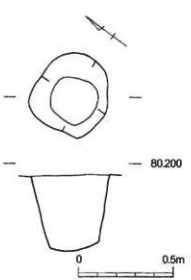
1　黒色土（10YR1.7/1）しまりなし　粘性なし
2　暗褐色土（10YR3/3）あまりしまりなし　粘性なし　地山との明瞭なラインはなく
床の方はアカホヤが混ざる
3　褐色土（7.5YR4/4）あまりしまりなし　アカホヤと焼土が混ざる

第55図　ＳＡ３実測図（1／40）

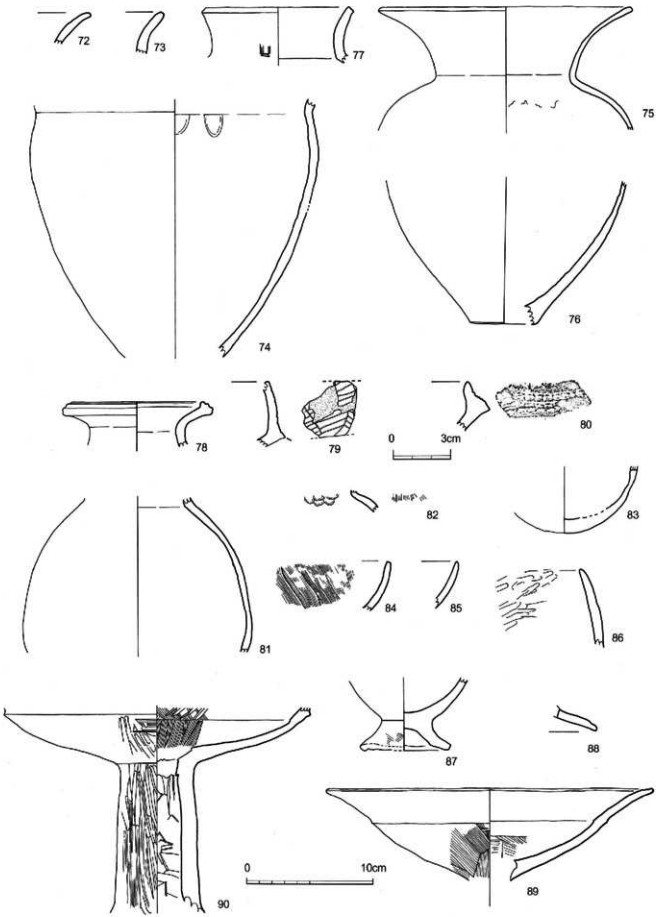


第56図　ＳＡ３出土遺物実測図（1／3）





第57図　ＳＣ10実測図（1／20）及び出土遺物実測図（1／3）



第58図　包含層出土遺物実測図(1)　(79～80：1／2　その他：1／3)

第４節　古代の遺構

道路状遺構

調査区北東側の谷地形部分において南西斜面から谷部分に向かって延びる硬化面が検出された。長さ4.73m、最大幅1.35m、厚さ0.39mを測る。約1.7m程の溝の中に砂や砂利、土などを層状に積み重ねた版築状の硬化部分とそれを挟むように黒褐色の硬化面が見られる。削平されてはいるが土層では高原スコリアを含む層がこの硬化面の上層に相当すると考えられ、高原スコリア降下以前の道路状遺構と考えられる。この遺構に関連するかは不明であるが、斜面部分の包含層から須恵器の短頸壺の口縁部（第58図92）が出土している。

第５節　まとめ

本遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺構と考えられる３軒の竪穴住居跡と２基の土坑が検出された。隣接する西畦原第１遺跡で検出した竪穴住居跡や掘立柱建物跡に比べると時期が新しくなり、東に開いた斜面地で、小規模集落が谷部際から若干標高の高い丘陵部は展開していったと考えられる。

ＳＡ２付近に集中して検出されたＳＣ１～ＳＣ９については、埋土土層の所見からＳＣ４とＳＣ９以外の土坑は住居廃絶後に掘削されたと判断できる。またこれらの土坑は、住居と土坑から出土した遺物に時期差がないこと、それぞれに接合関係がみられること、あえて住居の隅部を掘り込んでいたこと等から、ＳＡ２が完全に埋没する以前に住居の存在を意識しながら土坑を掘り込んだといえる。本遺跡で出土した弥生土器では、中期初頭から後期初頭の遺物として凹線文を施した壺の口縁部が１点出土している。また、終末期の土器が本遺跡の主体となり櫛描波状文を施した複合口縁壺の口縁部やタタキ成形の甕が多く出土した。類例としては高鍋町の大戸ノ口第２遺跡(1)のものが挙げられるが、出土例そのものはあまり多くなく、弥生時代終末のタタキ成形手法のあり方や広がりを考える上で注目される。隣接する西畦原第１遺跡では、凹線文土器が５点出土していたこともあわせて、瀬戸内地方や東九州地方の土器の影響を受けていたことがみてとれる。さらにＳＣ１出土の鉄製釣針の存在も特筆できる。県内では、土錘や石錘などの漁具出土が多いのに対して、釣針の出土例は、新富町内では上薗遺跡(2)で５～６世紀の釣針が出土しているなど数例しかない。今後、当時の漁法や漁具、対象とした魚などを解明する上で貴重な資料と思われる。

【註】

(1)「大戸ノ口第２遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第５集　1991年

(2)「上薗遺跡Ｆ地区・溜水第２遺跡」『新富町文化財調査報告書』第18集　1995年

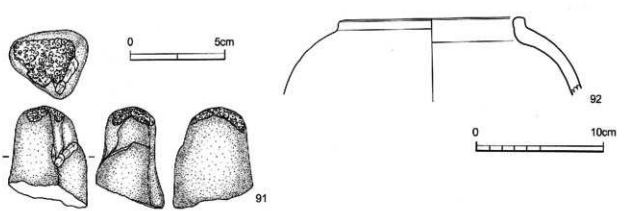
（参考文献）

「鶴野内中水流遺跡」『宮崎県教育委員会発掘調査報告書』第16集　1999年

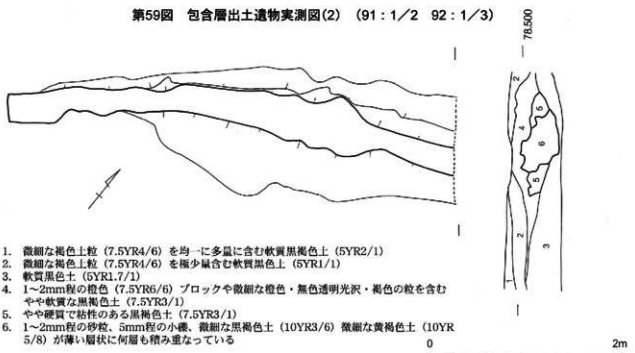
「新富町文化財」遺跡詳細分布調査報告書　新富町教育委員会　1982年

「浦田遺跡」「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　1985年

「考古資料ソフテックス写真集」第７集　名古屋大学文学部考古学研究会　1992年



第59図　包含層出土遺物実測図(2)　(91：1／2　92：1／3)



1. 微細な褐色土粒（7.5YR4/6）を均一に多量に含む軟質黒褐色土（5YR2/1）
2. 微細な褐色土粒（7.5YR4/6）を極少量含む軟質黒色土（5YR1/1）
3. 軟質黒色土（5YR1.7/1）
4. 1～2mm程の橙色（7.5YR6/6）ブロックや微細な橙色・無色透明光沢・褐色の粒を含むやや軟質な黒褐色土（7.5YR3/1）
5. やや硬質で粘性のある黒褐色土（7.5YR3/1）
6. 1～2mm程の砂粒、5mm程の小礫、微細な黒褐色土（10YR3/6）微細な黄褐色土（10YR5/8）が薄い層状に何層も積み重なっている

第60図　道路状遺構　(1／40)

第１表　西畦原第１遺跡旧石器時代出土石器計測表

遺物番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石材
1	Ⅵ層Ｆ･4	細石刃	2.00	0.95	0.20	0.30	黒曜石
2	Ⅵ層Ｆ･2	細石刃	1.00	0.50	0.10	0.10	黒曜石
3	Ⅶ層Ｈ･5	ナイフ型石器	3.30	1.50	0.65	2.90	頁岩
4	Ⅶ層Ｆ･2	ナイフ型石器	2.20	1.40	0.85	2.20	頁岩
5	Ⅶ層Ｅ･2	礫器	7.25	11.20	3.05	203.60	ホルンフェルス
6	Ⅶ層Ｆ･2	敲石	7.18	3.40	2.60	92.00	ホルンフェルス
7	Ⅶ層Ｉ･6	剥片	9.15	5.15	2.55	89.80	頁岩
8	Ⅶ層Ｉ･6	剥片	10.05	5.50	2.35	94.50	ホルンフェルス
9	Ⅶ層Ｈ･6	剥片	5.95	4.80	2.00	51.20	ホルンフェルス
10	Ⅶ層Ｇ･7	剥片	5.55	2.80	0.80	17.00	頁岩
11	Ⅶ層Ｉ･7	剥片	8.85	5.00	1.75	67.70	頁岩
12	Ⅶ層Ｆ･1	剥片	7.18	3.40	2.60	92.00	ホルンフェルス
13	Ⅶ層Ｈ･6	剥片	2.55	5.55	1.30	14.10	ホルンフェルス
14	Ⅶ層Ｈ･7	剥片	9.45	6.55	2.40	92.10	頁岩

第２表　西畦原第１遺跡旧石器時代出土石器計測表

遺物番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石材
15	Ⅳb層Ｆ･5	石鏃	1.90	1.40	0.35	0.50	チャート
16	Ⅳb層Ｇ･4	石鏃	1.85	1.30	0.25	0.30	チャート
17	Ⅳb層Ｆ･4	石鏃	2.70	1.70	0.35	1.40	チャート
18	Ⅳb層Ｄ･4	石鏃	1.70	1.50	0.30	0.60	チャート
19	Ⅳb層Ｄ･4	石鏃	2.30	2.80	0.30	0.70	黒曜石
20	Ⅳb層Ｇ･7	石鏃	2.30	1.60	0.40	1.20	チャート
21	Ⅳb層Ｇ･4	石鏃	1.65	1.50	0.30	0.50	チャート
22	Ⅳb層Ｇ･4	石鏃	2.55	1.40	0.30	0.90	チャート
23	Ⅳb層Ｆ･6	石鏃	2.30	1.85	0.40	1.40	チャート
24	Ⅳb層Ｅ･2	石鏃	2.35	1.70	0.40	1.20	チャート
25	Ⅳb層Ｆ･6	石鏃	1.50	1.40	0.35	0.50	姫島産黒曜石
26	Ⅳb層Ｇ･6	石鏃	1.60	1.45	0.35	0.60	チャート
27	Ⅳb層Ｇ･4	石鏃	1.55	1.40	0.30	0.50	ホルンフェルス
28	Ⅳb層Ｆ･4	石鏃	2.45	1.25	0.30	1.00	ホルンフェルス
29	Ⅳb層Ｅ･4	石鏃	2.10	1.60	0.30	0.70	黒曜石
30	Ⅳb層Ｆ･5	石鏃	3.20	2.35	0.40	1.30	姫島産黒曜石
31	Ⅳb層Ｆ･6	石鏃	2.30	1.30	0.40	0.40	姫島産黒曜石
32	Ⅳb層Ｆ･6	石鏃	2.30	2.10	0.45	1.30	姫島産黒曜石
33	Ⅳb層Ｆ･6	石鏃	2.20	2.00	0.51	1.40	姫島産黒曜石
34	Ⅳb層Ｅ･3	石鏃	2.70	1.85	0.30	0.90	チャート
35	Ⅳb層Ｃ･3	石鏃	2.20	1.85	0.40	0.90	頁岩
36	Ⅳb層Ｆ･3	石鏃	2.70	1.60	0.30	1.20	ホルンフェルス
37	Ⅳb層Ｅ･2	石鏃	2.05	1.35	0.30	0.70	頁岩
38	Ⅳb層Ｇ･5	石鏃	2.00	1.35	0.35	0.80	チャート
39	Ⅳb層Ｈ･7	石鏃	2.70	1.20	0.25	0.80	ホルンフェルス
40	Ⅳb層Ｆ･5	石鏃	1.40	1.80	0.35	0.50	チャート
41	Ⅳb層Ｆ･3	石鏃	1.55	1.80	0.25	0.20	チャート
42	Ⅳb層Ｆ･4	石鏃	1.60	1.30	0.30	0.10	黒曜石
43	Ⅳb層一括	石鏃	1.15	1.00	0.20	2.90	チャート
44	Ⅳb層Ｅ･6	石鏃	1.50	1.85	0.35	0.50	チャート
45	Ⅳb層Ｈ･5	石鏃	1.40	1.30	0.30	0.40	チャート
46	Ⅳb層Ｄ･4	石鏃	1.90	1.60	0.40	1.00	黒曜石
47	Ⅳb層Ｄ･3	石鏃	1.25	1.60	0.30	0.40	姫島産黒曜石
48	Ⅳb層Ｈ･5	石核	8.80	13.60	3.90	640.10	ホルンフェルス
49	Ⅳb層Ｇ･3	石核	7.50	11.30	5.10	450.90	ホルンフェルス
50	Ⅳb層Ｆ･6	石皿	10.85	12.15	3.00	602.10	ホルンフェルス
51	Ⅳb層Ｆ･4	二次加工剥片	2.90	2.90	0.90	7.10	ホルンフェルス

第３表　西畦原第１遺跡弥生時代出土土器観察表１

遺物番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
52	SA1	弥生土器	甕	口縁部				横ナデ、スス付着	横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の褐灰色・灰黄褐色粒	良好
53	SA1	弥生土器	甕	口縁部				風化著しい	炭化物付着、風化著しい	橙	橙	1mm以下の褐灰色粒	良好
54	SA1	弥生土器	甕	胴部				刻目貼付突帯、風化著しい	ナデ	浅黄橙	褐灰	1mm以下の明褐灰色・褐灰色粒	良好
55	SA1	弥生土器	甕	胴部				刻目貼付突帯、ナデ	横・斜方向のナデ	浅黄	浅黄	1.5mm以下の褐色・褐灰色粒	良好
56	SA1	弥生土器	甕	胴部〜底部		6.4		風化著しい、スス付着	丁寧なナデ、炭化物付着	にぶい橙	黒	2mmほどの褐色・褐灰色・黒褐色粒、7mmほどの灰色粒	良好
58	SA2	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯、横ナデ、縦方向のナデ、スス付着	ナデ、横・斜方向のハケ目、スス付着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の暗灰黄色・灰黄色粒	良好
59	SA2	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯、ナデ、横方向のハケ目、スス付着	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	2.5mm以下の灰白色・灰黄褐色粒	良好
60	SA2	弥生土器	甕	口縁部〜胴部	(32.6)			刻目貼付突帯(刻目貼)、横ナデ、横方向のハケ目の後ナデ、スス付着	丁寧なナデ	橙	橙	3mm以下のにぶい黄橙色、にぶい黄褐色粒	良好
61	SA2	弥生土器	甕	口縁部				横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1.5mm以下の灰黄褐色粒	良好
62	SA2	弥生土器	甕	口縁部				ナデ、スス付着	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐灰色・褐色粒	良好
63	SA2	弥生土器	甕	底部		(4.1)		ハケ目、ナデ、スス付着	ナデ	にぶい橙	にぶい黄	3mm以下の褐灰色・黒褐色粒	良好
67	SA3	弥生土器	甕	胴部				斜方向のハケ目、スス付着	風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1mm以下の灰色・褐灰色粒	良好
68	SA3	弥生土器	甕	底部		(7.2)		ナデ、スス付着	欠損	にぶい黄橙	褐灰	2mm以下の黄灰色・黒褐色・褐色粒	良好
69	SA3	弥生土器	壺	胴部				貼付突帯、横ナデ、スス付着	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	1mm以下の黒雲母	良好
70	SA3	弥生土器	壺	胴部				ナデ	ナデ、縦方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい橙	2.5mm以下の石英・褐色粒、褐色粒	良好
71	SA3	弥生土器	壺	胴部				縦方向のハケ目、黒斑	斜・横方向のナデ	にぶい黄橙	灰黄	1mm以下の褐灰居ろ粒	良好
72	SB70	弥生土器	壺	口縁部				ナデ、縦方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	1mmほどの褐灰居ろ粒	良好
73	SZ68	弥生土器	甕	頸部〜胴部				刻目貼付突帯、横ナデ、縦方向のハケ目の後横ナデ、スス付着	縦・斜方向のナデ	にぶい黄橙・褐灰	にぶい黄橙	2mm以下の灰白・褐灰・明褐色粒、微細な黒色光沢粒	良好
74	SZ68	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				ナデ、斜方向のハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰黄褐色・にぶい黄褐色粒	良好
75	SZ68	弥生土器	甕	口縁部〜胴部	(28.2)			斜方向のナデ目、指頭痕、スス付着	縦・横方向のナデ	浅黄橙	橙・浅黄橙	4mm以下の茶色・褐色・灰白色粒	良好
76	SZ68	弥生土器	壺	胴部				４条の沈線、円形浮文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の褐灰色粒	良好
77	SZ68	弥生土器	壺	口縁部〜胴部	(34.0)			頸部に１条・胴部に２条の貼付突帯、ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	2mm以下の褐色・灰白色・透明光沢・黒色光沢と黒雲母	良好
78	SZ68	弥生土器	鉢	口縁部〜胴部	(15.2)			風化著しい、スス付着	横ナデ、黒斑	にぶい黄	にぶい黄	1mm以下の茶色・褐色・黒色光沢・透明光沢粒	良好
79	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				口縁端部に刻目、刻目貼付突帯、ハケ目の後横ナデ、ナデ、スス付着	横ナデ、指頭痕、スス付着	灰黄褐・にぶい橙	灰黄褐・にぶい黄橙	1mm以下の灰白色・灰白色・にぶい褐色粒、微細な黒色光沢粒	良好
80	包含層	弥生土器	甕	口縁部				口縁端部に刻目、刻目貼付突帯、横ナデ、スス付着	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の茶褐色・灰褐色粒	良好
81	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯、横ナデ、縦方向のハケ目、スス付着	縦・横方向のナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1mm以下の灰色・灰白色・にぶい褐色粒、微細な黒色光沢粒	良好
82	包含層	弥生土器	甕	口縁部				刻目貼付突帯、横ナデ、スス付着	斜・横方向のナデ	にぶい黄橙	淡黄	3mm以下の灰白色・茶褐色粒	良好
83	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				貼付突帯、丁寧なナデ	ハケ目、ナデ	浅黄	にぶい黄橙	2mm以下の灰色・灰白色・褐灰色粒	良好
84	包含層	弥生土器	甕	口縁部				丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2mm以下の灰色粒・黒雲母	良好
85	包含層	弥生土器	甕	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	1mm以下の黒雲母・灰白色粒	良好
86	包含層	弥生土器	甕	胴部				貼付突帯、横ナデ	ナデ、指頭痕	褐	暗褐	1mm以下の黒雲母・黒褐色粒、3mm以下の灰白色粒	良好
87	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜底部	31.0	7.1	33.5	刻目貼付突帯、横ナデ、縦・斜方向のハケ目、スス付着	ナデ、炭化物付着	灰黄褐	灰黄褐	3mm以下の褐灰色・灰黄褐色粒	良好
88	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部		(31.2)		刻目貼付突帯、ナデ、縦方向のハケ目、スス付着	ナデ	にぶい褐・褐灰	にぶい褐	2mm以下の褐灰色・橙色粒、5mm以下の褐色粒	良好
89	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯(板状圧痕)、横ナデ、ハケ目、スス付着	ナデ	褐灰	にぶい黄橙	1mm以下の白灰色・王色粒	良好
90	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯、ナデ、スス付着	ナデ	にぶい黄橙・褐灰	にぶい橙	3mmほどの礫、2mm以下の褐灰色・赤褐色粒	良好
91	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯(布目痕)、横ナデ、スス付着	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の黒色・赤褐色・褐灰色粒	良好
92	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				刻目貼付突帯、風化著しい、黒斑、スス付着	風化著しい、黒斑	黄橙・褐灰	黄橙・褐灰	2mm以下の赤褐色・明褐色・灰白色粒	良好
93	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部	(29.0)			刻目貼付突帯、ナデ、ハケ目の後ナデ、スス付着	ナデ、指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下のにぶい赤褐色粒、微細な黄褐色粒	良好
94	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部	(28.0)			刻目貼付突帯、ナデ、縦方向のハケ目、スス付着、補修孔	斜方向のハケ目、ナデ、炭化物付着	にぶい褐・灰黄褐	にぶい褐・灰黄褐	3mm以下の褐灰色・にぶい黄橙・暗褐色粒	良好
95	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部	(27.0)			刻目貼付突帯(布目痕)、ハケ目の後ナデ、スス付着	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5mm以下の茶色・褐色・灰白色粒	良好
96	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部				貼付突帯、横ナデ、スス付着	横ナデ、黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙・黒褐	4mm以下の暗褐色粒	良好
97	包含層	弥生土器	甕	口縁部〜胴部	(20.0)			ナデ、ハケ目、スス付着	ナデ、黒斑	灰黄褐	灰黄・黒褐	2mm以下の灰黄・明褐色粒	良好

第３表　西畦原第１遺跡弥生時代出土土器観察表２

遺物番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
98	包含層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	(15.4)			風化著しい、スス付着	風化著しい	にぶい橙・灰黄橙	にぶい黄橙・浅黄橙	3mm以下の灰褐色・橙・灰色粒	良好
99	包含層	弥生土器	甕	口縁部～底部	(22.6)	5.6	23.0	縦・斜・横方向のハケ目、指頭痕、スス付着	横・斜方向のナデ、黒斑	灰黄褐	にぶい黄橙	1mm以下の灰黄褐色・にぶい黄褐色粒	良好
100	包含層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	(19.8)			横ナデ、ハケ目、スス付着	丁寧なナデ、黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙・黄橙	2mm以下の灰黄褐色・灰白色・黒褐色粒	良好
101	包含層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	(20.0)			横ナデ、工具痕、スス付着	ナデ	にぶい黄橙・暗灰黄	橙・灰黄褐	2mm以下の暗灰黄褐・にぶい褐色粒	良好
102	包含層	弥生土器	甕	口縁部	(16.8)			口唇部に２条の凹線文、縦・横方向のナデ	ナデ、指頭痕	灰黄褐	灰黄褐	1mm以下の灰白色・灰色粒	良好
103	包含層	弥生土器	甕	底部		6.6		横ナデ、スス付着	縦・横方向のナデ、黒斑	灰黄褐	黒褐	4mm以下の褐灰色・黒褐色粒	良好
104	包含層	弥生土器	甕	底部		7.2		縦方向のハケ目、横ナデ、スス付着	横ナデ、黒斑、炭化物付着	にぶい黄橙	黒褐	2.5mm以下の灰白色・褐灰色・灰黄褐色粒	良好
105	包含層	弥生土器	甕	底部		6.6		横ナデ、スス付着	丁寧なナデ、スス付着	にぶい黄橙	黄灰・黒	3mm以下の褐色・赤褐色粒	良好
106	包含層	弥生土器	甕	胴部～底部		(6.6)		斜方向のハケ目、横ナデ、スス付着	風化著しい	灰黄褐	にぶい黄橙	3mm以下の褐灰色・灰白色・灰黄褐色粒	良好
107	包含層	弥生土器	甕	底部		6.6		ナデ、スス付着、底に工具痕	ナデ、炭化物付着	にぶい黄褐	黒褐	4.5mm以下の灰白色・褐灰色・灰黄褐色粒	良好
108	包含層	弥生土器	甕	底部		(6.5)		縦方向のハケ目、横ナデ	ナデ、指頭痕、黒斑	灰黄	黄灰	2mm以下の灰色・褐色・にぶい黄橙色粒	良好
109	包含層	弥生土器	甕	底部		(6.2)		縦・横方向のナデ、スス付着、黒斑	風化著しい	にぶい黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色・浅黄橙色・褐灰色粒	良好
110	包含層	弥生土器	壺	口縁部	(34.0)			口唇部に鋸歯状文、横・縦・斜方向のハケ目	円形浮文、横ナデ、横・斜方向のハケ目	にぶい褐	にぶい褐	3mm以下の灰白色粒、1cmほどの礫	良好
111	包含層	弥生土器	壺	頸部	頸部径(12.2)			斜方向のナデ、縦方向のハケ目	風化著しい	灰黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰白色・褐灰色・にぶい黄橙色粒	良好
112	包含層	弥生土器	壺	口縁部				口唇部に鋸歯状文、ナデ	横ナデ、円形浮文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の灰黄褐色・褐灰色・透明光沢粒	良好
113	包含層	弥生土器	壺	口縁部				口唇部に鋸歯状文、ナデ	風化著しい	にぶい橙	橙	4mm以下の灰白色粒、2mm以下の灰色粒	良好
114	包含層	弥生土器	壺	口縁部	(13.4)			口唇部に連続刺突文、ナデ、スス付着	横ナデ、スス付着	黒褐・灰褐	灰黄褐	1.5mm以下の灰白色粒	良好
115	包含層	弥生土器	壺	口縁部	(24.0)			風化著しい	風化著しい	灰黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の灰色色・褐灰色・にぶい黄褐色粒	良好
116	包含層	弥生土器	壺	口縁部～頸部				２条の沈線、ナデ、スス付着	風化著しい、スス付着	橙	橙	1.5mm以下の灰白色粒	良好
117	包含層	弥生土器	壺	口縁部				横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色・灰白色粒	良好
118	包含層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	12.0			横・斜方向のナデ、ミガキ	ナデ、黒斑	にぶい黄褐	灰黄褐	3mm以下の褐灰色・灰白色・灰黄褐色粒	良好
119	包含層	弥生土器	壺	口縁部				穿孔、ナデ、横方向のミガキ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1mm以下の褐色粒	良好
120	包含層	弥生土器	壺	口縁部				ナデ、黒斑	ヘラミガキ、黒斑	黒・にぶい黄	黒・にぶい	2mm以下の灰白色・浅黄橙色粒	良好
121	包含層	弥生土器	壺	口縁部	(6.2)			横ナデ、歯の後ミガキ	ミガキ	にぶい橙	黄	2.5mmほどのにぶい褐色粒、1mm以下の灰白色・枚褐灰方粒	良好
122	包含層	弥生土器	壺	口縁部				口唇部に２条の凹線文、ナデ	ナデ	にぶい黄褐・橙	にぶい橙	1.5mm以下の黒雲母・褐色・灰白色粒	良好
123	包含層	弥生土器	壺	口縁部	(11.6)			口唇部に３条の凹線文、横ナデ	横ナデ	黄褐	にぶい黄褐	1mm以下の白灰色・浅黄橙色粒	良好
124	包含層	弥生土器	壺	口縁部				口唇部に３条の凹線文、ナデ、赤彩	ナデ	明赤褐・にぶい橙	黄褐	2mm以下の黒雲母・褐色・灰白色粒	良好
125	包含層	弥生土器	壺	口縁部				口唇部に２条の凹線文、ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	黄灰	にぶい橙	1mm以下の茶色・褐色・灰白色粒	良好
126	包含層	弥生土器	壺	口縁部	(10.6)			口唇部に３条の凹線文、横ナデ	ナデ	にぶい黄褐	黄灰	1.5mm以下の灰白色粒	良好
127	包含層	弥生土器	壺	頸部	頸部径(11.8)			２条の貼付突帯(１条は刻目)、ハケ目	斜方向のナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	3mm以下の灰白色粒	良好
128	包含層	弥生土器	壺	頸部				４条の沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5mm以下の灰白色粒	良好
129	包含層	弥生土器	壺	頸部～胴部	頸部径(13.4)			３条の貼付突帯、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	1mm以下の灰白色・褐灰色粒	良好
130	包含層	弥生土器	壺	胴部				４条の貼付突帯、横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ	にぶい黄褐	褐灰	7mmほどの黄灰色粒、4mmほどの灰白色粒	良好
131	包含層	弥生土器	壺	胴部				２条の刻目貼付貼付突帯、風化著しい	ナデ、指頭痕	赤褐	にぶい褐	6mm以下の赤褐色・白色・灰色粒	良好
132	包含層	弥生土器	壺	胴部				円形浮文、１条の沈線、ナデ、横方向のヘラミガキ	ナデ、黒斑	灰白・橙	橙	0.5mm以下の灰白色・浅黄色粒	良好
133	包含層	弥生土器	壺	底部		(6.0)		縦方向のミガキ、ナデ	縦方向のミガキ、ナデ	にぶい黄橙	灰	2.5mm以下の茶色・褐色・灰白色粒	良好
134	包含層	弥生土器	壺	底部		(8.4)		ヘラミガキ、ナデ、スス付着	ヘラミガキ、ナデ、スス付着	黒褐	灰白	3.5mm以下の灰白色・灰色粒	良好
135	包含層	弥生土器	壺	底部		(9.0)		ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ、ナデ	明赤褐・灰	黄灰	2mm以下の灰白色・にぶい黄橙色粒	良好
136	包含層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	(12.9)			ナデ	ナデ	褐	褐灰	4mmほどの灰黄色、2mm以下の灰白色・灰色・灰黄褐色粒	良好
137	包含層	弥生土器	高坏	坏部	(20.8)			ナデ、スス付着	ナデ、スス付着	浅黄	浅黄	4mm以下の灰白色・灰色・赤褐色粒	良好
138	包含層	弥生土器	鐸形土製品	頭頂部				穿孔、ナデ、指頭痕	穿孔、ナデ、指頭痕	橙	橙・灰黄褐	1mm以下の褐色・灰白色粒	良好
										浅黄橙	浅黄橙		良好

第５表　西畦原第１遺跡弥生時代出土石器計測表

遺物番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石材
57	SA1	男根状礫	4.70	1.70	1.50	14.8	ホルンフェルス
64	SA2	砥石	10.50	4.10	1.75	87.1	頁岩
65	SA2	砥石	13.00	8.00	2.10	293.8	頁岩
66	SA2	砥石	30.00	9.80	3.20	1350.0	頁岩
139	包含層	磨製石鏃	2.60	1.60	0.25	1.4	鱗片状頁岩
140	包含層	磨製石鏃	3.00	2.45	0.25	2.7	鱗片状頁岩
141	包含層	石鏃未成品	5.45	3.15	0.75	12.6	鱗片状頁岩
142	包含層	石鏃未成品	3.20	2.10	0.35	2.3	鱗片状頁岩
143	包含層	石鏃未成品	4.90	1.80	0.60	5.0	鱗片状頁岩
144	包含層	石鏃未成品	2.85	1.55	0.40	1.5	鱗片状頁岩
145	包含層	石鏃未成品	1.90	2.15	0.38	1.0	鱗片状頁岩
146	包含層	石鏃未成品	3.30	3.15	1.12	14.3	鱗片状頁岩
147	包含層	石鏃未成品	3.80	2.95	0.70	4.6	鱗片状頁岩
148	包含層	石鏃未成品	4.75	2.90	0.60	6.1	鱗片状頁岩
149	包含層	石鏃未成品	4.60	1.30	0.35	3.2	鱗片状頁岩
150	包含層	石鏃未成品	2.95	2.30	0.55	3.8	鱗片状頁岩
151	包含層	砥石	10.80	3.30	1.00	46.5	頁岩
152	包含層	砥石	9.20	7.25	2.10	170.5	頁岩
153	包含層	砥石	15.80	5.65	1.80	259.0	頁岩
154	包含層	敲石	9.15	4.30	3.55	173.0	頁岩
155	包含層	磨石	6.70	6.20	3.50	207.3	砂岩

第６表　西畦原第２遺跡Ｄ区アカホヤ火山灰層上：石器及び鉄器計測表

遺物番号	出土地点	器種	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	石材
15	SA1	石器	石皿	19.90	24.50	10.50	6500.0	尾鈴山酸性岩
16	SA1	石器	磨石	8.00	7.40	2.60	231.6	砂岩
17	SA1	石器	石包丁	3.95	6.85	0.50	21.7	ホルンフェルス
18	SA1	石器	石包丁	4.90	6.90	0.90	42.6	頁岩
61	SA2	石器	石皿	32.20	21.50	6.40	5200.0	砂岩
62	SA2	石器	石包丁	5.25	8.15	0.90	56.0	ホルンフェルス
63	SA2	石器	石包丁	4.75	8.15	1.00	63.3	頁岩
64	SA2	石器	砥石	11.10	4.45	1.80	112.0	頁岩
65	SA2	石器	砥石	9.20	2.75	0.70	27.7	頁岩
66	SA2	石器	礫器	4.80	7.20	1.10	34.7	ホルンフェルス
91	包含層	石器	敲石	5.45	4.20	3.60	79.5	ホルンフェルス
19	SA1	鉄器	不明	2.20	4.50	0.35	0.9	
20	SA1	鉄器	不明	2.80	1.20	0.25	3.3	
67	SA2	鉄器	釣針	4.70	2.10	0.60	2.0	
68	SA2	鉄器	不明	2.80	2.10	0.13	2.6	
69	SA2	鉄器	不明	2.85	1.20	0.20	4.4	

第７表　西畦原第２遺跡Ｄ区弥生時代～古墳時代出土土器観察表１

遺物番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部～頸部	(13.8)			横・斜方向のナデ、スス付着	横ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	1～5mmの黒・褐色粒	良好
2	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				斜方向のナデ、斜方向のタタキ目	横方向のハケ目	橙	にぶい橙	3mm以下の黒褐・灰褐・灰白色粒	良好
3	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部～底部		4.6	19.4	ナデ、スス付着、黒斑	横・斜方向のハケ目、黒斑	にぶい黄橙	灰	1～3mmの茶褐・灰色粒、1mm以下の橙色粒	良好
4	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		6.2		斜方向のタタキ目、スス付着	縦・横・斜方向のナデ、指頭痕、黒斑	橙	オリーブ黒	1～5mmの黒・赤褐色粒、高師小僧	良好
5	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	底部		4.0		ナデ	ハケ目	橙	橙	4～6mm茶色粒、4m以下の茶・灰色粒	良好
6	SA1	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部				ナデ、黒斑	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1～5mmの黒・白色粒	良好
7	SA1	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部	(15.5)			縦・横方向のナデ、黒斑	ハケ目、ハケ目の後ナデ、ナデ	淡黄	にぶい黄橙	3mm以下の黒褐・暗赤褐色粒	良好
8	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	底部		(5.9)		ナデ	ナデ、黒斑	橙	黄灰・にぶい黄橙	3.5mm以下の茶・黒・灰色粒、2mm以下の白色粒	良好
9	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部				ナデ、黒斑	横方向のハケ目、指頭圧痕	橙・黒	橙・灰黄	2mm以下の茶色粒	良好
10	SA1	弥生～古墳時代土器	甕	底部				ナデ、黒斑	ナデ、工具痕あり	灰黄・にぶい黄橙	橙・灰黄褐	微細できめ細か	良好
11	SA1	弥生～古墳時代土器	壺	底部				ナデ、黒斑	ナデ、工具痕あり	にぶい橙	橙	1～2mmの黒・白色光沢粒	良好
12	SA1	弥生～古墳時代土器	壺	胴部～底部	胴部径(11.0)			ナデ、黒斑	ナデ	橙、明黄褐	橙、明黄褐	1mm以下の光沢粒・黒色粒	良好
13	SA1	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部				斜方向のナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の黒・白色粒	良好
14	SA1	弥生～古墳時代土器	高坏	坏部	(19.3)			ミガキ、黒斑	ミガキ、黒斑	明黄褐・黄灰	浅黄橙	3mm以下の黒褐・赤褐色粒、1mmの光沢粒	良好
21	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部～胴部	19.3			縦・斜方向のハケ目、横・斜方向のタタキ	横・斜方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	5mm以下の茶色粒、3mm以下の白色粒	良好
22	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部～底部	19.4			横・斜方向のタタキ、横方向のタタキ後ナデ、スス付着	縦・横方向のナデ、黒斑	にぶい橙	橙・黄灰	3mm以下の茶・黒・白・褐色粒、4mm大の褐色粒	良好
23	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部～頸部	(12.9)			縦方向のナデ、横方向のタタキ、スス付着	横・斜方向のナデ	明黄褐	浅黄褐	3mm大の茶・灰色粒、1～2mmの茶・灰色粒	良好
24	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部				斜方向のハケ目、黒斑	斜方向のハケ目、斜方向のナデ	にぶい黄褐	明黄褐	3mm以下の灰白・黒色粒	良好
25	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部				斜方向のハケ目の後ナデ、ハケ目	横ナデ、斜方向のハケ目	にぶい橙・褐灰	にぶい褐	3mm大の褐色粒、1～3mmの白・赤褐・灰色粒	良好
26	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		(4.8)		横・斜方向のタタキ、底部にタタキ・黒斑	斜方向のハケ目	明黄褐・橙	明黄褐・灰黄	6mm以下の茶色粒、3mm以下の灰・白色粒	良好
27	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		(5.1)		タタキの後ナデ、黒斑、スス付着	縦・横・斜方向のナデ、黒斑、炭化物付着	にぶい黄橙・橙・黄	にぶい黄橙・橙・黒	1～3mmの黒・褐灰・暗赤褐・灰白色粒	良好
28	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		(5.4)		タタキ、黒斑	ナデ、黒斑	にぶい黄橙・橙	にぶい橙・黒	3mm以下の黒・白・暗赤褐色粒	良好
29	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	胴部～底部		(4.4)		ナデ、指ナデ、指頭圧痕、スス付着	ナデ、指ナデ、黒斑	にぶい黄橙	にぶい黄橙・黒	4mm以下の茶・灰白・黒色粒	良好
30	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	底部		(5.2)		タタキの後ナデ、ナデ、スス付着	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	7mm以下の茶・灰白色粒	良好
31	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	胴部～底部		(7.3)		斜方向のタタキ、底部にタタキ・黒斑	ナデ、黒斑	にぶい黄橙	にぶい橙	1～5mmの褐灰・灰白・白色粒	良好
32	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部	(13.7)			横ナデ、頸部に3条の凹線の上から斜方向に刻目を入れた貼付突帯	縦・横方向のナデ、黒斑	橙	橙・暗灰黄	4mm以下の茶色粒、2mm以下の白色粒	良好
33	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	頸部				ナデ、頸部に斜方向の格子状に刻目を入れた貼付突帯	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の茶・白色粒	良好
34	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部	(9.5)			斜方向のハケ目	横・斜方向のハケ目	橙	橙	2mm以下の茶・灰白・白色粒	良好
35	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部～頸部	(4.8)			横・斜方向のナデ、黒斑	横ナデ、指頭圧痕	橙・黒	橙	3mm大の茶色1個、0.5mm以下の黒色粒	良好
36	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	底部		(3.3)		横・斜方向のナデ、黒斑	指ナデ	橙・黒	橙	2mm以下の茶・黒色粒	良好
37	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部	(6.0)			ハケ目の後ミガキ	ナデ、工具痕あり	にぶい黄橙・暗灰	明黄褐	1～3mmの黒・暗赤褐・灰白色粒	良好
38	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				横・斜方向のナデ、4条の櫛描波状文	横ナデ、ナデ	橙	橙	3mm以下の茶・灰白色粒	良好
39	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				横ナデ、6条の櫛描波状文	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3mm以下の茶・灰白色粒	良好
40	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				横ナデ、櫛描波状文	横ナデ	橙	明黄褐	2.5mm以下の灰白・茶色粒	良好
41	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				横ナデ、櫛描波状文	横ナデ	橙	橙	2mm以下の茶・白色粒	良好
42	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部				横ナデ、櫛描波状文(押し引き様)	横ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙	灰黄	2mm以下の茶・白色粒	良好
43	SA2	弥生～古墳時代土器	壺	頸部～胴部				風化著しい	ナデ	橙	にぶい黄橙	3mm以下の茶・白・黒色粒	良好
44	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		(5.7)		縦・横方向のハケ目、黒斑	横・斜方向のハケ目、黒斑	黄橙・暗灰	黒	1～5mm以下の淡黄・赤褐・灰白色粒、光沢粒	良好
45	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		5.0		縦方向のミガキ、黒斑	ナデ、黒斑	褐灰・灰黄	褐灰・灰黄	1～2mmの黒・茶・灰色粒	良好

第８表　西畦原第２遺跡Ｄ区弥生時代～古墳時代出土土器観察表２

遺物番号	出土位置	種別	器種	部位	法量(cm)			手法・調整・文様他		色調		胎土の特徴	焼成
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
46	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	底部		(5.4)		ナデ、黒斑	ナデ、黒斑	にぶい黄橙・黒	黒褐	1～5mm以下の黒・灰白・淡黄色粒	良好
47	SA2	弥生～古墳時代土器	甕	底部		(3.2)		タタキ、タタキの後ナデ	指ナデ、黒斑	橙・にぶい黄橙	灰黄・黒	6mm以下の黒・茶・灰色粒、3mm以下の白色粒	良好
48	SA2	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部～底部	25.7	3.1	9.1	口唇部に2条の凹線・その下に細い貼付突帯、横ナデ、縦・斜方向にミガキ	縦・斜方向のミガキ	にぶい橙・橙	にぶい橙・橙	3mm以下の灰色粒、2mm以下の灰白・褐色粒	良好
49	SA2	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部				口唇部に2条の凹線・その下に細い貼付突帯、ミガキ、黒斑、スス付着	ミガキ、炭化物付着	橙・黒	橙	1.5mm以下の乳白・黒褐色粒	良好
50	SA2	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部	(24.3)			口唇部に細い貼付突帯、ハケ目の後ミガキ、黒斑	ハケ目の後ミガキ、黒斑	にぶい黄橙・黒	にぶい黄橙・黒・橙	1～3mmの乳白・褐灰色粒	良好
51	SA2	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部～底部	(23.0)	(6.5)	(10.0)	ナデ、黒斑、底部に沈線	ナデ、黒斑	明黄褐・灰黄褐・暗灰	にぶい橙・褐灰・黒褐	1～5mmの黒・黄灰・暗赤褐色粒	良好
52	SA2	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部	(22.9)			ナデ、スス付着	ナデ、黒斑	橙	橙・黄灰	3mm以下の黒・茶褐色粒	良好
53	SA2	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部				縦・横方向のナデ、スス付着	横ナデ、黒斑	橙	橙	2.5mm以下の茶・白色粒	良好
54	SA2	弥生～古墳時代土器	台付鉢	坏部～脚部	(12.9)			縦・斜方向ナデ、指頭圧痕、黒斑	横・斜方向のハケ目	にぶい黄橙・橙	橙	3.5mm以下の茶色粒、2.5mm以下の白色粒	良好
55	SA2	弥生～古墳時代土器	台付鉢	脚部		(12.0)		ナデ	横・斜方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4mm以下の茶色粒	良好
56	SA2	弥生～古墳時代土器	台付鉢	脚部				横ナデ、穿孔あり	ナデ	橙	橙	2mm以下の茶色粒、1mm以下の白色粒	良好
57	SA2	弥生～古墳時代土器	高坏	坏部	(29.6)			横・斜方向のナデ、工具痕あり	横・斜方向のミガキ、黒斑、指頭圧痕	橙	橙・にぶい黄橙	7mm大の黒色粒1個、3mm以下の茶・黒・灰・白色粒	良好
58	SA2	弥生～古墳時代土器	高坏	坏部				ミガキ、黒斑	ナデ	橙・灰	橙・灰	3mm以下の灰白・黒・赤褐色粒	良好
59	SA2	弥生～古墳時代土器	高坏	坏部				横ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ、黒斑	橙	橙・褐灰	1～3mmの白・灰白・黒褐色粒	良好
60	SA2	弥生～古墳時代土器	高坏	脚部		17.0		ナデ、ナデの後ミガキ、5つの円形透かし	ナデの後ハケ目、指頭圧痕	にぶい黄褐・褐灰・橙	橙	1～2.5mmの茶・灰白色粒、4mm大のにぶい褐色粒	良好
70	SA3	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部～底部	(19.7)	(4.5)	(24.2)	横・斜方向タタキ、帯状に朱色に変色	斜方向のハケ目、帯状に朱色に変色、黒斑、ナデ、指頭圧痕	にぶい橙・明赤褐	にぶい橙・明赤褐・にぶい黄橙	5mm以下の黒・茶色粒、4mm以下の白色粒	良好
71	SC10	弥生～古墳時代土器	高坏	脚部		(16.3)		縦方向のミガキ、ミガキ後のナデ、6つの円形透かし	指押さえの後ナデ、横・斜方向のナデ	にぶい黄橙・橙	橙	4mm以下の茶・灰色粒、2mm以下の白色粒	良好
72	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				横・斜方向のナデ	横ナデ、黒斑	明褐	にぶい橙	3mm以下の茶・灰褐色粒、微細な光沢粒	良好
73	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部				ナデ	ナデ、口唇部を面取	橙	橙	4mm以下の茶色粒、1.5mm以下の白色粒	良好
74	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	頸部～胴部	胴部径(22.8)			ナデ、黒斑、スス付着	ナデ、黒斑、指頭圧痕	にぶい橙・黒	にぶい橙・にぶい黄橙	1～5mmの黒・灰白・褐灰・赤灰色粒	良好
75	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	口縁部～胴部	(19.5)			風化著しい	風化著しい	橙	橙	1.2mm以下の黒・茶・灰・白色粒	良好
76	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	胴部～底部		(5.4)		風化著しい	風化著しい	橙	灰黄	1.3mm以下の黒・茶・灰・白色粒	良好
77	包含層	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部～頸部	(11.3)			ナデ、ハケ目	横ナデ	橙	にぶい黄橙	6mm以下の茶・灰色粒、1.5mm以下の白色粒	良好
78	包含層	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部～頸部	(10.2)			口唇部に2条の凹線文、横ナデ	ナデ	橙	橙	5mm大の白色粒2個、3mm以下の白・灰色粒	良好
79	包含層	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部				鋸歯状文、ナデ	横ナデ	橙	橙	4mm大の茶色粒1個、2.5mm以下の茶・灰色粒	良好
80	包含層	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部				横ナデ、櫛描波状文(押し引き様)	横ナデ	橙	橙	2mm以下の灰・茶色粒	良好
81	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	頸部～胴部	胴部径(18.2)			タタキ	ナデ	橙・にぶい橙	にぶい橙	1～5mm灰白・褐灰・赤褐・白色粒	良好
82	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	頸部				横ナデ、ハケ目	指頭圧痕	にぶい橙	灰橙	2.5mm以下の黒褐色粒	良好
83	包含層	弥生～古墳時代土器	甕	底部				ナデ、黒斑	風化著しい	橙・にぶい橙・黒褐	にぶい橙	1～5mmの灰白・灰・赤褐・黒色粒	良好
84	包含層	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部				ナデ	ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	2～2.5mm茶褐・灰褐色粒	良好
85	包含層	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部				横・斜方向のナデ、黒斑	横ナデ	にぶい褐・黒	にぶい橙	2mm以下の茶色粒、1mm以下の白色粒	良好
86	包含層	弥生～古墳時代土器	鉢	口縁部				横・斜方向のナデ、黒斑	ナデの後ミガキ	橙・黒褐	橙・にぶい橙	4mm以下の灰白・黒・白・にぶい赤褐色粒	良好
87	包含層	弥生～古墳時代土器	台付鉢	胴部～台		6.6		ナデ、斜方向のハケ目	ナデ	橙・明黄褐	明黄褐	4mm以下の茶・白色粒	良好
88	包含層	弥生～古墳時代土器	台付鉢	脚部				ナデ、穿孔	ナデ	橙	橙	2mm以下の茶・黒・白色粒	良好
89	包含層	弥生～古墳時代土器	高坏	坏部	(26.0)			縦・横方向のハケ目	横・斜方向のハケ目	にぶい橙	灰褐	3mm以下の黒・灰白・暗赤褐色粒、5mm以下の暗赤褐色粒	良好
90	包含層	弥生～古墳時代土器	高坏	脚部				横方向のハケ目、ハケ目の後ミガキ、黒斑	横方向のハケ目、ハケ目の後ミガキ、黒斑	明赤褐・褐・黒褐	橙・黒褐	1～3mmの黒・白・灰白色粒	良好
92	包含層	弥生～古墳時代土器	壺	口縁部～頸部	(13.7)			横ナデ	横ナデ	橙・明赤褐	橙	2mm以下の茶色粒、1mm以下の乳白・茶褐色粒	良好